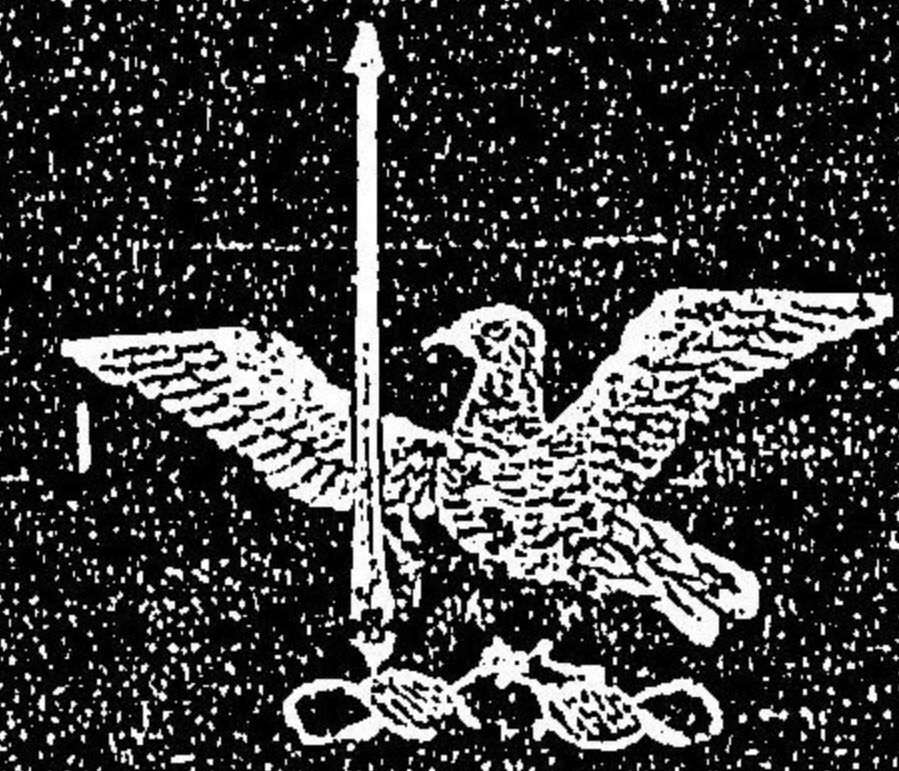
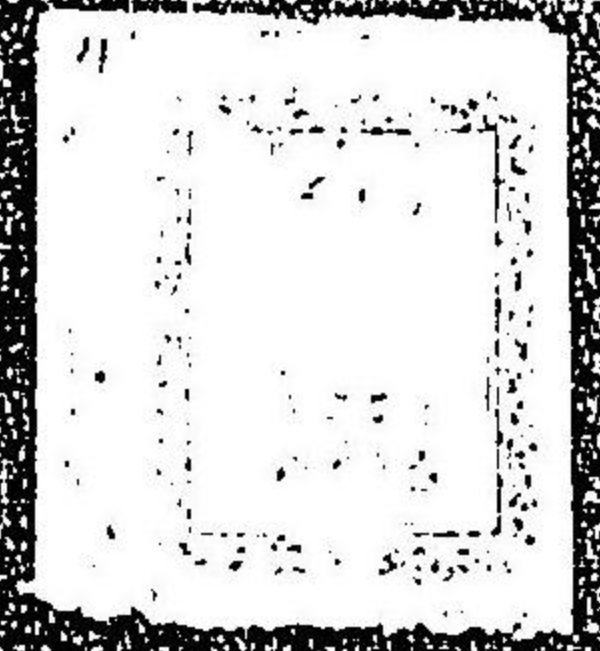


Nov. 1911 - Seattle



戸澤 姑射
野 馮 靈

共 譯

序

喜劇「御意のまま」が、沙翁の數ある喜劇中にありて、最も神韻を具へたる佳作たるは、多くの評家が一致する所にして、余も亦之に同せんとす。其描ける舞臺は重に野外の天地にして、緑り深きアルデンの森を吹きわたる涼風は、そのことも知らず讀む人の襟を撫で、行く心地す。さればこの劇を味ふものは、いつしか俗惡の穢土を離れ、例へば葡萄酒の美酒に酔ひたらんが如く、うつらくと夢に入り夢を出て、到底冷靜なる批評的態度をとりて、作の目的をさぐり、その合理不合理をきはめんなどの念を起す能

序

明治

41 5 21

中央

はず。又かくの如きは到底無用の業に屬す。「御意のまゝ」は徹頭徹尾理想境の描寫なり。厭ふべきもの、畏るべきもの、憎むべきもの、歎くべきものは、例へば春の淡雪の、未だ地に觸れずして早く融解し去るが如く、單にその片影をとゞむるのみにて、やがて跡方もなく消え去り、後にはたゞ萌ゆる若草と、うらゝかなる春光とを留むるのみ。雪は積まんが爲めに降るとのみ思はん人には、その妙味の大半は解し難かるべし。

さるにても沙翁の頭腦の屈伸自在なるには今更乍ら驚歎せざるを得ず。前を見れば崇重雄大、極めて實質に富

める史劇あり。後を見れば飽まで辛酷極めて熱烈、専ら人間の罪惡を描き、良心の呵責を描き、過失、大望、奢侈、驕慢の頭上に落下し勝なる運命の冷酷を描き、怨恨、嫉妬、虚偽、忘恩、その他あらゆる人心の狂瀾と、人生の浮沈とをば洞察し盡し、描寫し盡したる大悲劇あり。渠はこの中間に於て、しばらく轉地保養などに赴きたる心地にて、優々如としてかゝる清純可憐なる喜劇の傑作を草す。眞にこれ之く所として「御意のまゝ」ならざるはなき也。ある一種の典型を固守し、一步をその外に踏み出し得ざるが如き陋態は毫もこれなし。余や今俗務の餘暇を以て、辛くも本篇の譯

を終り、之を剞劂に附せんとするに當り、わが筆の毫も「御意のまゝ」ならざりしを顧みて慙然たるもの之を久うす。

明治四十一年三月四日の夕

雨雪の窓をうつをきゝつゝ

馮 虛 識

「御意のまゝ」解説

- (一) 創作及び出版の年月
- (二) 材料の出所
- (三) 本篇の特色
- (四) 本篇の梗概
- (五) 主要なる人物の性格

(一) 創作及び出版の年月

「御意のまゝ」が沙翁の手に成りたる年月は正確に知り難けれど、大體一五九八年の歳末より一六〇〇年の中頃迄と推定せらる。こは當時の書

創作の
年月 籍組合の報簿の記入篇中にあらはれたる引用の句及びその筆致、さては當時の史實に徴せる暗示等より下されたる斷論にして、沙翁學者の間には多少興味ある問題なるを失はねど、爰には唯だ此推定の結果のみを記して止むべし。

出版の
年月 出版の年月は創作の年月に比すれば大におくれ、一六二三年
フォリオ版の沙翁集中に收められるを嚆矢とす。

(二) 材料の出所

既に屢々繰りかへされしが如く、沙翁は結構、事件等の借用に關しては極めて無頓着なる作者にして、縦横自在に他の作者の物語等を取りて之をわが藥籠中のものとなし、之に新生命を與へて以て得意の神腕を發揮

せり。勿論『御意のまゝ』とても其選には漏れざる也。本篇の原本と稱す
ロッチの『ロ
ザンデ』
ynde. 是也。この物語は一五九〇年の刊行にかゝり、その筆致は、かのリイリの『ユーフィーズ』流の華麗にして氣取れる趣あり。當時の幼稚なる物語中にありては比較的出色の文字なれど、固より沙翁のと比較すれば甚だしく影薄く力弱きを免れず。原作に全く無きものに沙翁の附加せる人物も又少なからず。例へばデュークス、タッチストーン、オードリ等の如きは原作には全く無き所にして、是等の中、前二者の如きは最も生氣ある人物の中に列するに足る。原作の人物の姓名も又變化されたるもの多し。ロセイダはオルランドとなり、サラディンはオリヴァーとなり、アリンダはシーリアとなり、モンタナスはシルヴィアスとなる

の類是也、又原作にありては國主二人は、血屬の關係なきに、沙翁は之を兄弟となしてオルランド、オリヴァー兄弟に相對せしめ、原作にありては、アリシダ(シリア)は、ロザリンドに對する友愛の爲めに追放されるれど、この劇にありては自己の意志にてロザリンドと同行す。其他差異の個所尙ほ多く、原作に見出すべき流血、格闘、盜賊、復讐等の分子は劇中より除去せられて、徹頭徹尾平靜和樂の空氣を破らじとつとめたる痕明か也。

(三) 本篇の特色

『御意のまゝ』とは名からしていかにも暢氣な趣充てり。何故にこの題名の出でたるかは、勿論作者以外何人にも充分明亮なる能はず。或る人は謂らく、この劇全體の空氣がいかにも氣樂にして、

殊に其結末の一場の如き、當事者全般に満足を與へ、萬事篇中の人物の御意のまゝに運びたる故にこの題名を得たるならんと。又或る人は謂らく、この中に描く所は自由濶達、社會の制裁とか、行儀禮法とかいふ面倒なもの、痕跡なき田園生活なればならんと。そは兎まれ角まれ作者の空想が斯くの如く遠慮會釋もなく發揮せられたる例は他に殆んどなし。『御意の最も愉快なる作』
『まは、決して、沙翁、集中の、大作に、あらず、されど、最も、心地よく、最も、愉快なる、喜劇たるに、就きては、何人にも、異議なき所也。』
『ヴェニス商人』や『から騒ぎ』等の喜劇には其中に流貫する一道の悲劇的要素あり。此篇にありては毫末もかゝることなし。腹黒かりし人物も忽ち豹變して善人となり、危険らしき事件もよく／＼眼を定めて見れば其中に可笑味あり。あらはれ來る篇中の男女は、眞に人生の深き悲

痛激しき情熱には経験なき人々なり、否、畏らくは経験し得ざる人物也。且つ彼等が主として活動する舞臺はアルデンの森にして、先づ人の心を奪ふ。アルデンの森とはナムール、リエージュ、ルクセンブルグ附近の山林にしてアルデンて、實際かゝる名稱の土地がなきにあらねど、例へば桃源と稱する一種の理想境のみ、故に人若し冷靜なる批評的眼光を以て此劇に對せば確かに其興味の一半を味ふ事を得ず。例へば、オルランドが假裝のロザリンドを眞の戀人と見立て、愛するが如き、國主フレデリック又はオリヴァーが俄然として心を入れかへるが如き、又特殊の境遇の多數の男女が一場に相會するが如き、是等はアルデンの森以外には畏らく見出し得ぬ事件なるべし。されどこれは除り理屈に合はずなどいふものあら

ば、畏らく作者は破顔一笑して「御意のまゝに解釋し玉へ」と答ふるならん。この篇はしばし塵界の煩累を離れてホッと一息つかんとする者に供へたる別天地なり。夢の世界也。腹をふとらす牛肉にあらずして、胸を空かせる清涼劑也。未だ人生の怨恨、悲痛、虚偽、罪惡に食ひ足らぬものは去つて他に赴け。沙翁集中にもかゝる種類の珍味は決して尠きを憂へず。たゞ是等大牢の珍に飽きたる者は、しばらくこの篇を繙きて、その額の皺を延ばし、その胸の鬱結を解くも亦不可ならざるべし。

當時の

沙翁

沙翁が『御意のまゝ』の如き愉快なる喜劇をもしたる所以は又決して偶然にあらず。沙翁自身がアルデンの森中の人物たりし也。渠は漸くこの頃迄に、その年來の宿望たりし歴史劇を完成し、而して尙ほ未だ悲劇に筆を染むるに至らず。言はゞこの時期は沙翁の骨

休めの時代也。徐ろに其豊富なる想像を静平閑寂なる山林に馳せて、清鮮なる野外の空氣に熱したる頭腦を冷さんとせる也。この一篇が特に愉快なるは、實にこの點に存せずんばあらず。

(四) 本篇の梗概

時代は何時頃とも定かならねど、佛蘭西國が尙ほ幾多の侯伯に分割されたる封縣時代の事なり。此等の諸侯の一人は、猛惡なる其實弟フレデリック主 國主 クの爲めに追放されて、三四の忠臣を隨ひ、アルデンの森に退き住みぬ。この舊國主は元來仁慈の心深く、名利に恬淡にして、一種詩的なる飄逸の性情を具へたるが故に、甚だしくは身の不幸薄命を歎息せず、寧ろ自由なる山林の生活を樂みつゝ、日毎に慕ひ寄る舊臣を相

手にして、往古のロビンフッドの生活も斯やと思はるゝ生活を續け居たり。

この舊國主に一人の愛娘あり、其名をロザリンドといふ。新國主フレデ

ロザリンドと

シーリア

リックの一女シーリアとは夙に親密の間柄にして、親々の間こそ不和なれ、相互の交りにかはることなければ、ロザリ

ンドは父と同行せず、依然として新國主の殿中に住みて面白からぬ日月を送り、僅かに優さしきシーリアに慰められて居たり。或る日兩人は園内を漫歩してありけるに、偶々其日殿中には國主のお抱力士チャールスと他の力自慢の若者等との間に相撲の技あり。既に數番の勝負は濟みて盡く怪力を具へたるチャールスの勝利に歸したり。次ぎにチャールスに當らんと申出でたる男を見れば、骨格こそ逞しけれ、可憐なる一個の美少年なれば、見る人何れもこれに同情を催し、冷酷の氣味ある國主さへ成るべ

く之を中止せしめんとす。斯る所にロザリンド、シリアの兩姫は使の者
相撲の 導かれて見物の爲めに來りしかば、二人は左右より言葉を
勝負 盡して件の少年の無謀を諫止す。されど少年は頑として之に
耳を傾けず、稍々焼け氣味に放言していふやう、
「負けた所が耻を搔くのは誰からも相手にされぬ。小生一人、投げ殺された所が、日頃惜しくもあらぬこの命、歎いて呉れる親友もなければ、之に苦勞をかける處もなく、身に附屬せる財産もなければ、世間に對して損もかけぬ。廣い世界に、たゞ場所塞ぎに生れた小生、死んで了へば却て他人の功德になります」と。かくてこの相撲は開始されしに、兩人の美姬の同情や少年の元氣を鼓舞したりけむ。それとも元來その膂力やすぐれけむ、瞬く間にチャールスを抛げ倒して、少時の間は身動きのとれぬ目に逢はせたり。

少年の 最初よりわが身の薄命に引きくらべて、このあはれなる少年
身分 に満腔の同情と憐憫の念とを傾け居たるロザリンドは、此意
外の大勝利を見て拊舞雀躍しぬ。既にして件の少年が名をオランダと
呼び、故サー・ローランドの遺兒なるをきくに及びて、ロザリンドの同情は
更に一步を進めて愛の萌芽は、早くもその場にきざすに至れり。これ件の
サー・ローランドはわが父の股肱の寵臣なれば、折も折とてロザリンドは
いたくも其心を動かされたる也。かくて心こもれる一幣を與へつゝ、首に
かけたる金鎖を脱して、オランダに贈り、爰にこの物語の主脈たる戀の
關係は成立するに至れり。

かゝる中にも國主フレデリックは漸くロザリンド姫に對して猜忌の念
を催しそめぬ。其一理由はロザリンドが餘りに優雅可憐にして衆望の中

心となり従ひてその父なる舊國主に對して人民の心を寄せしめ、わが身

ロザリンド、シ

の安穩を危くせんを畏れたるが故也、終に或る日突然激

リアの出奔

語を以て之に放逐の旨を宣告す。シリア姫は側にあり

て大に父の不徳冷酷を責め、其無慈悲なる宣告を取消さしめんと盡力したれど父が頑としてきゝ入れざるを認むるや、ロザリンド姫に對する友愛の餘り、その一國の繼嗣としての身分をば惜氣もなく振り棄て、アルデンの森に向ひて、ロザリンド姫との同行を約すに至れり。かくて途中盜賊其他の危害を免れん手段として、シリア姫は賤の乙女に變裝して名をアリエーナと改め、又ロザリンド姫は田舎の少年に變裝して名をガニミロザリンドと改め、後段幾多の滑稽奇談の種子は爰に胚胎せり。やがて二人は尙ほ他にタッチストーンと稱する機才ある茶坊

ロザリンド
姫の男裝

主を伴ひ、多少の金銀財寶を身につけ、即夜アルデンの森をば指して殿中をばのがれ出てたり。

吾人は物語の混雜を避けんが爲めに、主として女姓の主人公たるロザリンド姫及び其周圍に就きて述べたり。されど彼等がアルデンの森に着くに先立ちて、之に對せるオルランドに就きて少しく述べざるべからず。

オルランドと

既に一言せるが如く、オルランドは故サリアーランドの一

其兄との不和

子なるが、前に長兄あり、名をオリヴァーといふ。父のみまかれ

る頃オルランドは尙ほ幼弱なりければ、其長兄の家に養はれしがオリヴァーは鄙吝の性質にして、其幼弟を遇するに道を以てせず。下男同様専ら之を雜役に使用し、成るべく其天賦の人品と才能とを抑壓せんと力めぬ。温良なるオルランドも終に餘りの兄の壓制に堪へず、漸く之に反抗の態度

をとりて不平を訴ふるに至れり。之が爲めに兄オリヴァーの嫉視は益々加はり、機會を見てオルランドを除かんとす。遇々力士チャールスが國主の面前に於て飛び入り力士と勝負を決するの舉あり。時こそ來つれと、渠は人をしてオルランドを煽動して、チャールスとの相撲に加入せしめ、他方には又チャールスに言ひ含めてオルランドを投げ殺さしめんとし、既に前段に述べたるが如き勝負とはなりたる也。然るに其相撲の結果はオリヴァーの豫期に反して、末弟オルランドの大勝利に歸したれば、今度は更に手段をかへて、オルランドを焼き殺さんとす。然るに其惡計は、はしなくも老僕アダムの耳に入り、其勸告により、オルランドはアダムを携へて兄の家を出發す。かくて諸所を彷徨せる後、やがてアルデンの森に到着するに至れり。今や篇中主要の人物等は種々の事情にて、引き續きアルデンの森に來

り會せり。その中心といふべきは舊國主の一群也。其周圍には舊臣の多數及びデイクスと呼べる畸人あり。一方には舊國主の愛娘にて男装せるロザリンド(變名してガニミード)あり。其周圍には其従妹なるシーリア(變名してアリエーナ)あり、茶坊主タツチストーンあり。平生舊國主とは會合し乍ら、わざと其名を名告らず、土着の牧羊者の如く見せかく。他方にはオルランドあり。早くも舊國主とめぐり合ひて、其姓名素性を名告り、亡父の縁故を以て君寵を一身に集むる身となりたれど、夢ならぬ身の男装せるガニミードが我意中の戀人なるを知らずして、頻りに煩悶焦慮す。他にもアルデンの土着の住民にてをかしく戀愛に耽れる少年少女あり。境は水清く、風すゞしく、樹木緑りなるアルデンの森、人は地位人爵を振り棄て、多くはたゞ戀の苦勞をするだけの無邪氣のともがら、一鉢の空氣のいか

に愉快にいかに詩的なるべきは大抵察するに難からざるべき也。

オランダとロ

ザリンドの戀

最後に纏まるべき四組の夫婦の中にて、其中心たるは勿論ロザリンド姫とオランダとの戀物語也。オランダ

はアルデンの森に着きてよりも、ロザリンドに對する戀々の情堪へ難く、或は樹皮にロザリンドの名を刻み、或は又戀人を讃へたる歌の文句を樹枝に貼りつけなどして僅に憐れを漏らせしが、是等は勿論ロザリンド姫の眼にもとまりぬ。姫はオランダの嬉れしき心根を喜ぶものから、尙ほ飽までその誠實を試みんとや思ひけむ、容易に其實を告げず、飽まで生意氣盛りの牧草者の若者らしく見せかけ、或る日之と森の中にて會せる時、男女の戀愛が一種の發狂に過ぎざるを笑ひ、かゝる疾病などは相談づくにて平癒せしむることの容易なるを説く、かくて其療治法を説明していふ

やう、「相手の男は此私を自分の戀人——惚れた女子と假りに決める。そして私の許へ日參して、かれこれと口説くのです。私は固より氣まぐれ盛り、の青二才ですから、悲しい顔をしたり、女々しい顔をしたり、グラ／＼に氣をかへて見たり、イヤにデレツとして好いた殿御は主ばかりでナ事を言ふて見たり、高くとまつて見たり、移り氣を出して見たり、それから薄ッペらにもなる、厭き／＼もなる。泣上戸にもなれば笑上戸にもなる。色氣といふ色氣は何でもして見せるが、さりとて何の色氣にも、これぞと言つて纏まつた所、とり留めた所は勿論無い。今日好いて居るかと思せれば、翌日は厭つて見せる。今大變取り持つかと思れば、やがて脛を食はせる。泣いて見せたり、唾を吐いてやつたり、とう／＼相手の男を、色狂から一變して正眞の狂人にする。つまる所が、賑やかな人混みがいやになり、浮世をすねた詫住

居身にしむ秋を知るといふ状態にしてあける。これから一ッこの流儀で、貴所の療治に取りかゝり、身体中に戀の痕跡もないやうにしてあげます」と。其言ふ所眞面目なるが如く、又眞面目ならざるが如く、オルランドとて餘り信用もせねど、蟲が知らすともいふべきか、終にロザリンドの言葉に従ひ、毎日其許に尋ね行きて、戀の數々をばかき口説くを常としたり。

或る日のことなりき、ロザリンドはシーリアと共にオルランドの來訪を待ちつゝありけるが、兼ねて約束の刻限をば二時間も過ぎ乍らオルラ

オリヴァーとし

ーリアとの戀

ンドの姿は見えず、やがてその代りに現はれたるは其實兄のオリヴァーなりき。オリヴァーの一身にも亦、この間に種々の奇談は起り居たり。渠は先づ國主フレデリックの爲めにロザリンド、シーリア兩姫の出奔事件に關係あらずやと疑はれ、其結果所領地を沒收の

上に追放の刑に處せられ、終に流れくゞて此アルデンの森に來りぬ。かくて長の旅路に疲勞困憊の餘りとある樹蔭に假睡して、今にも獅子の餌食にならんとせる所を、偶々側らを通りかゝれるオルランドは、件の獅子を殺して兄の身を救ひぬ。仇をば恩にてかへしたるオルランドの廣量大度に、今迄冷酷なりし流石の卑劣漢も、慚汗背を霑すに堪へず、忽ち翻然として前非を後悔し、爰に兄と弟とは從來の悪感情を一擲して相抱擁したるを理なるたゞ獅子との格闘の際に、オルランドは輕からぬ痛手を蒙り、ロザリンド訪問の約束を履行することを得ずなりたれば、今オリヴァーは弟の使者となりて申譯の爲めに爰に來訪せるなりけり。

心の底より先非を後悔したるオリヴァーの模様には、何となく可憐に、何となく眞率にして愛すべき所やありけむ。シーリアはこの暫時の會見の

間に深くオリヴァーに愛着し、オリヴァーも亦田舎乙女の装束したるシリア姫の無邪氣なる所に深く思を寄せ、之と共に牧羊者となりてアルデンの森に永住し、所有の財産などは悉く弟のオルランドに譲らんと覺悟するに至れり。

以上二組の正副の戀物語の外に、尚ほ他にも景物的の戀物語二組あり。一と組は茶坊主タチストーンと田舎美人のオードリとの戀物語。此他の二組の戀の氣紛れな、破鍋にとち蓋的の結合は他に比類なく愉快にして同時に一種の諷諭を藏す。他の一と組の戀物語は更に奇也。百姓男のシルヴィアスは百姓女のフィビーに對して百度以上の熱情をそぐ。然るに件のフィビー女は男装せるロザリンドに戀着して、シルヴィアスに決も引かけず、常に愛想づかしの文句ばかり並ぶ。

是等の四組の縁談が首尾よく纏まるべき任務は實にロザリンドの獨力にかゝれり。或る日ロザリンドは例の如く男装のまゝ父の舊國主の許に赴きて、若しこの場にロザリンドを連れ來らば之をオルランドに嫁す決心なるや否やを問ふ。舊國主必らず嫁すべしと誓ふ。次ぎにオルランドに向ひ、ロザリンドを娶るの決心なるや否やを問ふ。勿論オルランドは言下にロザリンドを娶るの決心なるを誓ふ。次ぎにロザリンドはフィビー女に向ひ、若しフィビーが自分との結婚に不服の場合には、兼ねて言ひ寄りつゝあるシルヴィアスと結婚すべきや否やを問ふ。フィビーは萬一さる場合には必らずシルヴィアスに嫁すべきを誓ふ。今やすべての手筈は残る所なく整ひぬ。ロザリンド、シリアの兩人は衆人の前を辭するや、直にこれまでの假裝を脱ぎ棄て、兩人とも嬋妍たる

大團圓

妙齡の貴婦人の服装になりて、突如として衆人の面前に現はれ出づ。舊國主の歡びは固よりのこと、オルランドの舞、オリツァーの雀躍等は、大抵察知すべきのみ。彼等が婚禮の式は、忽ちにして緑樹の下に於て舉行せられぬ。同時にタッチストーンとオードリ、シルヴァーストとフィビーも御相伴の婚禮をなし、世界の春はこの場に集まれるの觀を呈しぬ。この歡天喜地の儀式の濟むや濟まざる中に更に、一吉報あり、突如として一座の人々を驚かす。そは外にもあらず、國主フレデリックがさる偶然の機會より舊惡を後悔して、國主の位をば再びその兄君に譲り、己れは隠遁せんとすとの報知にぞありける。さなきだに賑かなる此一坐は、此吉報にいよ／＼浮かれ立ち、大陽氣の舞踏にて千秋樂となる。

(五) 主要なる人物の性格

輕妙愉快を主とせる此劇中に、人の耳目を聳動し、人を威壓する程の偉大なる人格を見出すことを得ざるは止むを得ざる所なれど、愛すべき人

ロザリンド

物親むべき人物は甚だ多し。其中の筆頭をロザリンドとなす。

すぐれて才氣あれど、同時に他面には多感にして甚だ初々しき所ありて、何所までもやさしき乙女の本色を失はず。沙翁集中の少女中最も可憐なりとの評には一人として異議を挿むものなし。天稟の機才にかけて、ロザリンドは殆んど何人にも劣らねど、かの『から騒ぎ』中なるピアアトリスの辛辣なる趣がなく、常に其裡に春の光の如き温かみを藏す。才力と美容とにかけては幾分『ヴェニス商人』中のボルシヤに類

似の痕をとどむれど、たゞボルシャに見るが如き雄辯廣辭なく、又その男性的威力を缺きて、遙かに女性的なる趣を帯ぶ。ビアトリスの前に在りては、普通平凡の男子は、蹀足^{はたし}て逃げ出さざるべからず。ボルシャの前にありては、大抵の男子は首をさげて崇拜せざるべからず。ロザリンドの前にありては、殆んどいかなる種類の男子も、恍然として愛の力に酔はざる能はず。女性として圓滿真に愛すべきものを求めば、ロザリンドは確かに古今の文界に無雙なるべきか。

オルランド

オルランドは、俠氣もあり、又力量もあり、器度寛宏にして情熱に富む。殊に其淡泊にして、厭味なきは、渠をして人望を獲得せしむる一大要素。ロザリンドの愛を得たるも、決して無理はなけれど、たゞ才力にかけては、寧ろ平凡にして、到底ロザリンドの敵にあらず。但しオル

ランドの如き人格は、實際の世間において、其人望と愛敬とを以て、往々意外の成效を收め得るものにして、却つて厭味ある大才人をして後へに墮着たらしむること尠ならず。之を要するに、オルランドは一個の色男のみ。格別の人物とも思はれず。されど色男中にありて、渠は確かに理想的の者にして、決してオホンとすまます。丹次郎一流の下劣なるものにあらざる也。シーリアに至りては、何所までも可憐なり、柔和なり。決して才氣なきものには、あらねど、格別の機智も示さず、又格別強固なる意志の力も見えず。シーリアと、萬づロザリンドの指導の下に働きて、内輪なる所若し、ロザリンドを以て太陽とせば、シーリアは確かに月也。單身にては、何事もなし得る性質にあらねど、たゞ其信ずる所の人の指導を得れば、飽までも忠實に飽までも従順に、假令水火の中なりとも願みずして

突進邁往すべし。オルランドの如きは、其失戀の日に在りては、他人の幸福を見て少しく怨言を發せり。シौरリアにありては決してかゝる事なく、ロザリンドがオルランドに戀ひするを見物しつゝ自身も共に歎ぶの風あり。かゝる少女の前にありては、犇猛無頼の惡漢といへども、自然その爪牙を收めて渾身の愛を傾けざるを得ざるべし。オリツァーがシौरリアを一見して直ちに熱情を捧ぐるに至りたるも、深くあやしむに足らざるべく、又シौरリアが専らオリツァーの悔悟せる所に同情して、敢て其舊惡を追及せざりしも、首肯し難きにあらざるべし。勿論何人もかの碌てなしのオリツァーに、此天女を與ふるは聊か勿躰なき心地す。されど退いて考ふれば、こは必らずしも然らず。思ふにオリツァーの悔悟は此天女の愛の光によりていよく本物となり了るべく、又シौरリアはわが眼前の良人を天下に二な

き愛の本尊と崇めて最大の幸福を味ひ得るなるべし。二人の結婚は決して良縁とは言ひ難けれど、又決して惡縁とも言ふべからざるが如し。

デエークスなる人物に就きては衆説盡く一致するに至らず。舞臺の上に

デエークス

ても最も演じ惡くき性格と見做され居るが如し。外面にあら

はれたる渠の特色は、平生陰氣にして皮肉を好み、他人の得意

に對してケチをつけ、他人の歡樂に水を注し、一般の人士より氣の知れぬ好かぬ人物として指彈せらるゝ點に存ずるものゝ如し。ざりとて又一方より見れば、其言動何となく上滑りにして感情を玩弄する趣あり。其胸底に大悲痛を藏して、眞に懊惱し苦悶する程の厭世家とも見えず。之につけて考ふるに、蓋し渠はその根本に於て甚だしく多感多情の人物か。かるが故に人生の不公平、不調和、さてはその矛盾、撞着に會する毎に、甚だしく

神経を害傷したり、たゞ渠は之と同時に才子肌なる所あり、真面目にその苦惱の爲めに自己一人の心血を腐らす迄に至る能はず、随時に之を外に發散して一時の快を食らんとせり、その口を突き出て出る所の毒舌、皮肉さては、すね返りたる行動は、即ち其胸裡の不安、不平、不快の餘瀝のみ、舊國主が渠を捕へて、放蕩にして肉慾に渴するものとせるは、單に皮相の觀察のみ、デイクスの如き人物は、或は時に放蕩もするならん、されどそは其すね返りたる行動中の一部のみ、色に溺れ、女に迷ふには、渠は餘りに人世がわかり過ぎ、餘りに智力が勝ち過ぎたり、兎に角、渠は一種の畸人なり、かはり者也、萬づお目出度主義の人物の揃へたるアルデンの森に、デイクスの如き人物が介在し居るは、人生の餘りお目出度からぬ他の半面を暗示するに足り、甚だ對映の妙を見る。

デイクスと對しては、茶坊主のタッチストーンあり、渠も亦一種の皮肉の臭

タッチストーン

味ある人物、愚物の假面の下に時々人の弱點を突く。その
デインスマイルなる少女との戀の思ひ出は、一般に男女

の戀愛に對して諷諭を向け、殊にオードリィ女との出來損ねの結婚は、事實の上に結婚其物を嘲けるもの也、其他内裏人の前にて内裏生活の馬鹿々々しさをとぎ、アルデンの森に着きて森林生活の下らなきを説くなど、恍惚した様子の中に常にさゝやかなる針を藏し、ある意味に於ては、デイクスの向ふを張り、淺き意味に於て人生の裏面の消息を少しづつ漏らしつゝあるものといふべし。

喜劇 御意のまま

登場人物

舊國主 流されてアルデンの森に生活す
 國主フレデリック 前者の弟、國主の位を横奪す
 アミエンス 舊國主の近侍の臣
 デエークス
 ル・ボー フレデリックの近臣
 チャールス 國主お抱の力士
 オリヴァー
 デエークス・ド・ボイス 故サー・ローランド・ド・ボイスの子息
 オルランド
 タッチストーン 茶坊主
 サイ・オリヴァー・マーテクス ト 牧師
 コーリン 老牧羊者
 シルヴィアス 牧羊者の若者

禮ハイのウニードリ女を愛する田舎者

アダム オリヴァーの下男
 デニス
 ロザリンド 舊國主の娘
 シーリア フレデリックの娘
 ファービー 女の牧羊者
 オードリ 田舎の少女
 其他侍臣、小姓、従者等

場所

オリヴァーの邸宅—國主フレデリックの御殿—
 及びアルデンの森

御意のまゝ

第一幕

第一場 オリヴァー邸の果園

オルランド (篇中主要の人物故サー・ローランドの末男にして) 及び
 アダム (親の時代より仕へ) 登場

自分の記憶によれば確しか斯うぢやと思ふネ、アダム—亡父上は、
 その遺言の中に私の分としてさうと千兩許の正金しかお譲與りな
 れぬ。そして今卿の申した通り精々大事に依むぞと私の薫陶方一切
 を兄者人にお任せになられたのぢや。これがわが身の不幸のそもそ

もの源始^{げんし}仲の兄などは大學まで進み、成績拔群との風評^{ふうへう}とりく。之に引きかへこの自分は、年中家にくすぼりかへり土百姓の待遇^{たいご}を受けて居る——イヤ待遇^{たいご}もないもの、何の待遇^{たいご}とて受けぬ食客^{しょくじや}の境遇^{きんご}、折角家柄に生れし甲斐もなく、牛馬同然の無待遇^{むたいご}を受けて居る始末ぢや。之に比べて見れば兄の乗馬の方が何れほど贅澤^{ぜいさく}に暮して居らう。飼料^{りよう}を吟味^{ぎんみ}されるばかりでなく、技藝^{ぎぎ}まで仕込んで貰ひ、馬の爲めにわざ／＼金に飽かして馬術手まで雇ふてある。それにこの身は家の内に放し飼^{かひかひ}豚^{ぶた}の寸が延びる外には何の得る所があるてなし、兄より受ける恩義^{おんぎ}は芥溜^{かひな}の芥を食ふ豚^{ぶた}兒^ことかはりはない。生れついて身に備へたる些少^{せうせう}の取柄^{とりがら}は、却つて兄の虐待^{くわいご}にもぎ取られる位のものぢや。食事は毎度^{まいど}下男と一鍋^{いっかく}の物をあてがひ、兄弟の好意^{こうい}は味塵^{あじじん}も見せ

ず、成るべくヤクザに育てあげて氏も素性も形なしにして除けやうと腕に縋^{すが}をかけての魂膽^{こんたん}。これがアダム、自分はいかにもつらくてならぬ、不肖なれども親ゆづりの一と件^{くだ}の氣性は備へて居るつもり、斯んな卑屈な生活はとともやりきれぬ。最うこの上辛抱する氣はない。と言ふて、まだ別に今の境遇^{きんご}を切り抜ける名案^{なあん}とてもないが——。

ムアダ ハテ旦那様が御座らっしゃつた、御兄様が……。

ラオル アダム、卿は少時^{せうじ}この場を外し、是非兄が自分を毒吐^{どくつ}く所を聴いて居て呉れよ。

アダム小階に身を潜める

カリヴァー登場

カリヴァー ヤイ／＼！此様な所で何をして居るのだから、汝は？

ラオル 何をするもので、爲たいにも教はつた藝がない。

ヴァーリ 怠ける事の藝なら誰にも負けまいが。

ラオル イヤ元々斯くヤクザに出来た厄介者を、一倍ヤクザに爲てのけやうとするのが貴所の思召、それ故御手傳の所思で態と怠けるのであります。

ヴァーリ コレ、嘸語を申さず些と精を出せい罰當り奴が！

ラオル では豚の番人でもしながら、豚と一所に糺殺でも食べますかナイヤハヤ何時如何なる悪事の報酬で乞食の身の上に零落れたかしら。

ヴァーリ コラ貴様は今何所に居るか、知つとるか。

ラオル 貴所の果園に居る。

ヴァーリ 何人の前に居ると思つてるかよ。

ラオル これはシタリ、さう被仰らるゝ御方よりは、拙者の方が百倍も精しく御存知ぢや、貴所は血を分けたる私の實の兄、苟くも兄として由緒ある家柄の血統を受けて居るなら同胞らしく此私を取扱つてくれ、て然るべきぢや、勿論世の中の習慣上、惣領と生れし貴所が私の上に立つは致方ない、さり乍ら貴所と私との中間に、十人、二十人の同胞が介在つて居るとしても、血統は矢張り血統ぢや、父の子たることは貴所も私も差別はない、但し一歩先きへ世の中に出たのであるから幾分か貴所が尊敬される資格が多いといふ事は認めて居る。

ヴァーリ 何をほざく、此青二才奴！

とオランダを打たんとす



まれさな辨勘御てじ免に私、もと方剛御テハムダア
相に様那巨大たれらな亡はてれそ一第！いせ
しえめすまみ濟

ラオル さア打つて見い、さア！力技

にかけては赤兒同然のち
手並

とオルランド兄の咽喉をつかむ

グアリ 手…手向ひ致すか、己れッ

土百姓！

ラオル 私は土百姓ではありま
せぬぞ。サー・ローランドの
末男でありますぞ。父の兒
を土百姓呼ばりする人
間こそ却つて百倍も土百

姓ぢや。若しも同胞の好意なりとなかつたなら、かゝる無禮を吐いた
舌の根を引き抜いてくれる迄、此咽喉は放しはせぬ。われと、我が身に
泥を塗るとは汝のことぢや。

下男のアダム小陸より走り出て、仲裁をする

ムアグ ハテ御兩方とも私に免じて御勘辨なされませい！第一、それでは
亡なられた大旦那様に相濟みますめえ。

グアリ コラ離さぬか、コラ！
とオルランドの手を離さんとす

ラオル 離して善い時節が来れば離してあげます。が、その前に言つて聞か
せる事があります。父上は御遺言の中に私の教育の事を一切貴所に
吩咐けられてあるのぢや。それに貴所は此身をば百姓同然に育てあ

げ立派な武士相應の氣風品格何一ツ與へまいとされたのでありま
すぞ。不肖乍ら父の氣性を受けついだる小生、モ一この上の我慢はせ
ぬ。これから早速武士相應の技藝を學ばせて貰ひます。若し又それが
不承知ならば、父上より御譲りの例の金額を渡して貰ひたい。之を資
力として世間に出て、浮世の瀬戸に立つて見る覺悟ぢや。

ヴァーリ フムそれで何うしやうといふのぢや。若しその金子が盡きたら乞
食なりとする氣かな。兎も角も家に入れ。最うこの上貴様の面倒は眞
平ぢや。遺言なり、何なり、貴様の注文も幾らか聞いてやる。それぢやか
ら、さアこの手を離して呉れ。

ラオル 自分の注文が通れば何にも好んでこの上反抗もしないサ。

オルランド 獨める手を離す、オリヴァー 願みてアダムを罵る

ヴァーリ 汝もさうと失せやがれ 老老爺奴!

ムアダ 老老爺でムりますか?—イヤ全くぢや、永い間の御奉公で、齒が残ら
ず缺けて了ふた。—それにつけても今更難有いのは大旦那様ぢや、元
の旦那様なら斯んな事は被有りはしねえ。

とオルランド、アダム兩人退場

ヴァーリ ムーのさばかりかへるナ。そろそろ小僧奴が増長して來るよし
よし、今に胴骨を打ち碎いてくれる。併し千兩の金子、アレはとてもや
れない。—ヤイ、デニス!

と高聲に下男を呼び立てる

ステニ 旦那様、何ぞ御用で?

ヴァーリ コラ、御抱力士のチャールズぢやが、彼者はまだ參つて居らぬか。

ステニ ハイ／＼あの方なら、旦那様に御用談があると申して、夙うに玄關に見えて居ります。

ウオリ 爰へ呼んでまゐるのぢや。

とアニス退場

こりや甘く運びさうぢや。相撲の勝負はいよ／＼明日ぢやナ。

と思入

チャールス登場

ルス チャールス これは御主人様、お早うムります。

ウオリ オ、チャールス殿善うこそ御光來——新御殿には近頃何ぞ耳新らしい話でもムらぬかナ。

チャー イヤ格別耳新らしいと申す話もムりませぬ、専ら陳い話で持ち切

るやうな譯で——御承知の通り先代さまは當代様の爲めに追放に逢ひましたてムりますナ。然る所、數ある御家來衆の中には、先代様のお後を慕ひ、われと進んで同じ流罪のお伴を致した者が三四名にも及びましてムります。就きましては、是等の方々の所領やら、歳收やらは、悉皆沒收の上當代様のお手元に繰り込まれて了ひました。つまり御損の行かぬ事でムりますから、當代様におかれましては、行きたがる者は、さして御制止にもなられませぬ。

ウオリ 貴殿にはロザリンド姫の事は御存知ありませぬかナ。彼者も父君諸共流罪になりましたか。

チャー 何う致して當代様の御姫君には、あの御方と稚馴染の従姉妹同志、一と通りならぬお仲善しにムります。若しもあのお方が追放さる

れば、御自分もお後を慕はう。若し單獨で取り残さるゝに於ては死ぬとまで御執心にムリます。で、ロザリント姫には、今以て殿中に御滞在、お上からも又御自分の愛娘の如く大事にされて居ますぢや。イヤ女子同志で、あれ位深い仲のお方は世間に類例がムリませぬナ。

ヴァーリ

先代の殿には何所へらに落ちつかると御様子でムるナ。

チャー

風の音信にきゝますれば、已にアルデンの森まで落ちのびられ氣の軽い同行者の數も多く、先づ往古のロビンウッドそのまゝの生活と承ります。尙ほ風評によれば、その後も夥多の若殿原が日毎に馳せ加はり、苦勞知らずに時日の經つ有様は、神代そのまゝぢやと申すこととてムります。(ロビンウッドは中世英人の理想の義賊、自由闊達の生活を送る)

ヴァーリ

時に貴殿には明日お上のお目通りに於て相撲の勝負を致さるゝ

とな？

チャー

いかにも致します。で、之に就きて御相談の儀がムつて、わざわざ參上致しました。實は内々承りますれば、御舍弟オルランド殿には、人知れず土俵に上つて拙者と勝負を決せらるゝ御所存の由にムります。明日は拙者が、一世一代の晴れの勝負、精一杯の所をやる所思、されば手なり足なり、へし折られずに、無事に戻れる者は、餘程上手に立ちまはらねばなりません。御舍弟はまだ若輩、骨が固まつて居りませぬ。日頃の御最負に對しても、かゝる未熟の若者を負かしてあげるは拙者甚だ心苦しいと申して、一旦土俵に登つた上は、拙者の面目もつぶすこともなりません。で、貴所さまへの好意を以て、わざわざ御内談の爲めに參上致せし次第、一應御説諭の上にて御舍弟の決心を繰

してくださるか、それとも又掻く耻辱は、それはつまり當人の心柄、仔細は無いと御斷念あるか、何れかに御了簡を願ひたうムります。

イヤ、チャールス殿、御親切の程は幾重にも感佩、何時かは御返禮の折もムらう。實は舍弟の了簡に就きては、兼ねて拙者も薄々耳に致し、内々人を以てその不心得を翻させるやうに盡力致して居たのぢや。が、彼奴固くさゝ入れませぬ。聞いてくださるがよい、チャールス殿彼様ナ剛情者は佛蘭西中にムりませぬ。野心飽まで強く能ある者を猜み、現在血を分けたこの兄に對しても、陰險な手段を工らむ奴でムる。それ故貴殿に於ても思ひ存分の事をされるがよい。指でも首でもブチ折つてくだされば本望ぢや、手ぬるい事ではとても駄目てムるぞ。若し貴殿が少しばかりの耻辱でもかゝせるとか、又は舍弟の方で存分

貴殿を負かし得ぬとか申す場合には、それこそ蛇の半殺し、毒でも盛られるか、鬪打でも食はせられるか、それとも係蹄でも張られるか、何れにしても何かの奸策を以て貴殿を亡きものにする迄は、到底中止する奴ではムらぬ。全く以てソノ拙者も涙ながらに申上げるが、全く以て、若輩にも似ず、あれ位の悪僕は今世にあるものぢやムらぬ。これにて兄弟の好意を以て、幾分遠慮して申すのぢやが、若し明白に彼奴の本色を暴露さうものなら、拙者の顔には確かに火がついて涙がこぼれ、貴殿の顔からは血の氣が失せて、眼の球が飛び出もしませうテ。

チャールス
ヤレ／＼今日參上して誠に僥倖でムりました。宜うムる。若し御舍弟が明日まゐりましたなら、精一杯辛い目に逢はせてやります。萬々一明日の勝負で御舍弟の足腰がさくやうなら、拙者は二度と晴れの

土俵には登りますまい。ドリヤお暇を致します。

オウアリ

それなら御大事にチャールス殿。

とチャールス退場

さてこれからの段取は、あの徒ら小僧の煽動方ぢや、大概これにて彼奴の始末も付きさうなものぢや、何故かは知らぬが、あれ程に憎らしい奴は天下に無い。併し彼奴は妙に温和しく、學問もさせぬに物事を識り、心懸が高尙で、イヤに諸人の人望を集めてゐる。中でも日頃混れる自家の下男どもから不思議に可愛がられ、お蔭でかく申す拙者はよく／＼安っぽく見送られて居る仕儀ぢや、イヤ併し最ふこれも長いこととはあるまい。今の力士奴が、始末をつけてくれるぢやらう。此方はたゞあの小僧奴を燃さつけて、相撲に出させるばかり。何りや早速仕事

にかゝらう。

と退場

第二場 御殿の前なる芝生

シーリア姫(當代の國主フレ)及びロザリンド(追放されたる先代の國主の一人姫即ちシーリア姫と従姉妹)
なりの間柄登場

リシア 拜みますわいな、ロザさま、萬望陽氣にしていたさます。

ロザリ これで精一杯陽氣にして居るつもり、最つと陽氣にせいとは、そりや御無理と申すもの、妾は流罪の父の身の上が案じられてなりませぬ。この苦勞の失せる迄は、達ておせがみは御無用にムります。リシア アラ、ロザ様、それなら妾がお慕ひ申すほど、貴嬢はこの妾を戀ひし

いとも、いとしいとも思ふてはくださらぬのでムリますな。假りに今叔父上さまが、妾の父上を流罪にしたと思召めせ。若し貴嬢さへ御一所なら、妾は貴嬢の父上を、わが父上と思ひます。貴嬢とて眞實妾の方でも慕ひ申すほど、この妾を思ふてくださるなら、それが出来ぬ等はムリますまい。

ロザ それなら妾も貴嬢の身の上にあやかつて、今の味氣なき身の上をふつり忘れて了ひますわいな。

リシ アノ、ロザさま、今更改めて申上げる程の事もムリませぬが、妾は父の一と粒種、又この後とて、弟妹の生れる目途は先づムリませぬで、貴嬢に折入つての御相談は、父の亡後に、是非國主の繼嗣をお譲り申したのでムリます。無理無體に、貴嬢の父上より横領したもののゆゑ、それ

をおとなしく貴嬢にお返し申したい妾の願望、名譽に誓つて、これは是非さう致します。若しこの誓詞を破るなら、この身は悪魔にでもなるがよい。それ故ロザ様、モシ、ロザ様、萬望陽氣になつてくだされませうな。

ロザ それほどに被仰るなら、これから陽氣になりますわいな。さう何ぞ面白い遊戯はありませぬかしら。

と二人はあれか、これかと遊戯に就きての問答宜しくあること、

タツチストーン (殿中に仕へ居る道化役貴人の御相手) 登場

タツチストーン 姫君さまに御注進、御父君の御召にムる。

リシ 汝は御使者の役目かいな。

タツチ イヤ拙者、名譽に誓つて申上げます、決して左様の者ではムリませ

ぬ、たゞ行つて呼んでまゐれと仰せつかつたまで、ムります。

リロザ 何所でそのやうな誓詞などを習ふて来たのぢや。

タツチ さる所の御武家さまから習ひました。その御武家が、イヤ拙者名譽に誓つて申す。この煎餅は甘い。が、芥子は不味い。と斯う申しましたので、然るに拙者に言はせると、不味いのが煎餅で、甘いのが芥子。全然嘘なので、尤も件の御武家などが、斯く申したところか、偽誓の罪には當りませぬナ。

リシー それは又何故ぢや？ 博學な汝の辯明をさゝたいものぢや。

リロザ さゝ早う智慧袋を開けて見せるがよい。

タツチ では、御兩姫とも此方へお出ましなされて、チロイと頬邊をお突き遊ばされませう。そしてお髭に誓つて、タツチは悪漢ぢやと申されませう。



頬とイロチてれさなしま出御へ方此もと姫兩御はで、チッタ
つ誓に髭おてしそ。うせまれさばそあき突おを遊
うせまれさ申とやら悪漢はチッタで

リシー 生憎妾には髭はなけれど、若しあるなら髭に誓つて申します。タツチは悪漢ぢや。

タツチ 生憎拙者は悪漢ではムりませぬが、若しさうであるなら、タツチの悪漢に誓つて申上げます。拙者は悪漢ぢや——ソレ御覽じませ。現在無いものを楯に引き出して誓詞を申した所が、それで偽誓の罪にはなりませぬ。件の御武家なども、元來名譽といふものを御所有

にならぬ故に名譽に誓つて何と申した所が咎はないよしや一步譲つて會て所有つて居たとしても例の煎餅芥子の話以前に何所ぞにその名譽を振り落して了ふてムる御方ぢや

リシ | アレ、ル・ポー卿が見えたわいな

リロザ | 何時も話柄の種の盡さぬあの方のお口

リシ | そしてその話柄を何時も人に聞かせやうとする。丁度親鳩が餌を啄んで雛鳥に與るやうに

リロザ | さぞ話で妾達の腹部が太りませう

リシ | 太つてもよいわいな。市場に出せば善い値に賣れます

ル・ポー(朝臣の一人にて)登場

御早うムりまする。ル・ポーの卿今日は何の御風評でムります

ル・ポー | 貴姫様方には結構なお勝負をお見落しになられました。残念なことにムりました

リシ | えッお菖蒲？何んな色の菖蒲で？

ル・ポー | 勝負の色でムりまする？何と御返答致してよきやら。小臣甚だ當惑に存じまする

リシ | 時と場合何様なりと御隨意に

ル・ポー | 貴姫様方は小臣を畑におまきなされます。實は貴姫さま方がお見落しになられました。相撲の勝負、それをお風評に參上致した儀にムりまする

ロザリ | それならその模様を物語つて貰ひませう

ル・ポー | さらば相撲の發端の所を少しばかりお風評申上げます。それが若

し御意に召しましたらば後は實地御覽なされますが宜しうムリ
ます。これから後の勝負が一番面白い所で、追ッ付爰へ參つてそれに取
懸る手筈にムリます。

リシ | シテ今迄に濟んだといふ勝負の模様は？

ル・ホ | 先づある所に、一人の老人と三人の息子とがムリまして――

リシ | 何ンぞ昔噺に、丁度そのやうなのがありさうで。

ル・ホ | 何れも尋常に生い立ちし三個の若者、發育充分、容貌端正、

リロザ | 今度は揭示そっくり、右心當りの者は當署に届出づべしとでも書いてありさう。

ル・ホ | で、先づ長男が力士チャールスと角力しました。するとチャールスに於ては、瞬く間に件の若者を取つて投げ、搦いた肋骨が都合併せて三枚、九

死一生の目に逢はせました續いてかゝる二番、三番倒し方が何れも
同一徹、現に三人とも皆彼所に倒れて居ります。あはれなるは右三
人の老父、わが子供達を抱きしめ、さめくくと悲歎の涙に暮れて居り
ますので、傍で見るもの一同も、自づと貰ひ泣きに泣き入る次第。

リロザ | まア氣の毒な！

タツチ | イヤ併しル・ホ様、姫君達がお見落しになつて、残念ぢやと仰せの
勝負は一體全體、何……何の勝負の事？

ル・ホ | 知れた事、今物語つた勝負の事ぢや。

タツチ | 畏れ入りましたナ何うも近頃はズン／＼世の中が開けて行きま
すナ、荒相撲を取つて肋骨を打ち折るのが、貴婦人達の眺向きの娯
樂とは、拙者躰の緒切つて初めて伺ひました。

リシ ほんに汝の申す通りぢやわいな。

リロザ でも斯んな肋骨折りの藝を見たいと申すものが他にもムリます

ので？ シーリア様貴嬢はこの相撲の勝負を御覧なされますか？

リロザ イヤ爰にお在の上は是非御覧にならぬ譯には参りませぬ。丁度此

場所が相撲場と指定され、已にそれ／＼其準備に取り懸つて居ります。

リシ ホシニ最う衆が彼所に見えたわいな。ロザ様、それではこのまゝ見て居ることに致しませう。

と一同片側に退く

離子 當國主フレデリック、近侍の面々、オルランド、力士チャールス、其他登場

國主 物ども早うく。如何に言ひ諭すもさゝ入れぬ若者、生命知らずの

罰は忽ち其身に運つて来る。

リロザ 彼方が、アノ、チャールスの相手になるのて？

リロザ 御意にムリます。

リシ マア年齒も行かぬ者を！尤も逞ましい面貌ではあれど。

國主 オ、姫も姪も兩人とも揃ふて居やるか！ 卿達も相撲が見物した

さに、この場に忍び込んで参つたのぢやナ。

リロザ お許可がいたゞけまするなら……。

國主 イヤ見物致したとて、格別の興もあるまいテ。相互の力量に雲泥の相違があるのぢやから、余も件の若者が不憫に存じた故、是非勝負を中止させうと思ひたれど、いかに諭すも聽き入れぬ奴ぢや。モ一度卿達にて説諭して見るがよい。或はさゝ入れぬとも限らぬ。

リシ
ル・ボ
の卿一寸あの若者を呼んでたもらぬか。
さう致すがよい。余はわざと塲を外すと致さう。

と國主後方に行く

ル・ボ
コレ／＼飛び入り力士どの、姫君達の御召であるぞ。
ン
オ
ル
ド
ラ
ハア畏りました。

リロ
ザ
今日の勝負は卿の方から力士チャールスを挑んだのであるか。

ラオ
ル
さうではありませぬ。先方は相手を選ばず何人でもかゝれとの觸込小生に於ても人真似見真似未熟の腕前乍ら、一當り當つて見る氣でありました。

リシ
それは又年齒にも似ず大膽過ぎし舉動ではある。敵手の膂力の程は卿も眼前見て居る筈。若し卿に見る眼かあり、思慮分別があるなら

ば、かゝる不釣合の力競が危き位は存じて居らう。卿の不利益は圖らぬほどに是非とも思ひとゞまつて危き業はしてたもるな。

リロ
ザ
萬望さうして呉れるが善い。此勝負に出ぬとて、いさゝかも卿の名に疵のつくことか。お上には妾達よりよきやうに申上げて中止の事に致すほどに。

ラオ
ル
イヤ折角の御言葉ではムりまするが小生の技もさう棄てたものでないかも知れませぬ。小生とて、高貴な御婦人方のお言葉を無下に謝絶致すのが相濟まぬことは存じて居りますれど、併し乍らこのまゝ後へは退かれませぬ。難有い御思召を杖とも柱とも心得潔く勝負を決したい所存にムりまする。若しこれで負けたとて耻を搔くは世に棄てられし小生一人投げ殺された所が、別に惜しくもなきこの

生命歎きを分つ親友を有たねば、之に苦勞をかける心配もなく、身に附ける財寶とでもなければ、世間に對して損耗もかけぬ廣い世界に只ボンヤリ場所塞げに生れし小生死んで了へば、却つて厄介者が一人丈減る譯かも知れませぬ。

リロザ あゝ心の儘になるなら、かよわくとも此力

リシ 妾も共々添へてあげたい。

リロザ 御大事に依みますぞえでも、これが取越苦勞で濟めばよいが！

リシ 首尾よく何うぞ！

力士チャールス進み出る

チャールス さう何うぢや、地面の中で晝寝がしたくなつたといふ勇士の二才どのは何所ぢや？

ラオル お待遠様。イヤ併しそれほど當方は虫が善くもないよ。

國主 試合はたゞ一回にて中止と致せ。

チャールス 畏れながらお上に申上げます。二度の試合は御念には及ばぬ儀と存じます。第一回から既に、お預かりの聲がかゝりさうなヤクザ相撲

ラオル 負かした上で拙者を愚弄る所存と見えますナ。が、まだ負けぬ中から愚弄るのは違つてませう。さう懸つてくれ！

リロザ 確ッかり依みますぞえ！

リシ 見えぬものなら、相手の力士の脚なりと引き倒してやりたい！

チャールス、オルランド兩人互に揉み合ふ

リロザ アレ、見事なあの立ちまはり！

リシ 一 まゝ氣が揉める何うしたら善からう！

カ士チャールス投げ倒さる囁采起る國主フレデリック進み出て

國主 勝負はモ、これまでぢや〜

ラホル 殿様に申し上げます。小臣はまだ臂力が出盡つて居りませぬが。

國主 チャールス、何うぢやナ、汝は？

ル・ボ お上に申し上げます、チャールスは言語がさげませぬ。

國主 早う運び去らせい！

チャールス運び去らる

若者汝の姓名を名告つてさかせい。

ラホル 小臣はオルランドと申すもので、サー・ローランドの末子にムリま
する。

國主 人もあらうに生憎ナ奴ぢやナ、汝の父は世に貴ばれし天晴の武士
てはあつたが、余とは始終反目の間柄ぢや。若し汝が他の家族の者で
ありさへせば、今日の働きは一層余が意に協ふたものを、兎も角も大
事に致せ。汝は遅ましい奴ぢや。別の父を名告つてくれ、ば誠に申分
がなかつたのぢやが。

と國主フレデリック、近侍の面々、ル・ボ、退場

リシ 一 (口ザリランド) 口惜しい父の御仕打、あの御言葉は何てムリませう。

ラホル 殿様が何と言はれても、此方はサー・ローランドの子で結構ぢや、末
の小僧で澤山ぢや。殿様の養子にすると言はれても、この名前は變へ
たくない。

と後方に退く

リロザ サイ・ローランドといへば、父上さまの二なき寵臣、又世の人もおしなべて敬ひ慕ふてぢや。若しての若者が、ローランドの子息であるとならば、前以て知れて居たなら、かゝる危険い業は、泣いて引き留めてもあげたものを。

リシロザ様これから御一所にあの若者に禮を述べ、元氣を添へてあげるとしませう。あの邪慳な酷たらしい、妾の父の氣性には、つくづく厭氣がさして來ました。——あの、モシ………

オルランド進み出る

只今はホンに御手柄でムりました。未依もしう存じます。

リロザ 無様なれどアノ………

ロザリンド首に懸け居る鎖を外してオルランドに與へつゝ

この鎖を御收めなされませ。拙き月日の下に生れ、何事も心に任せぬ妾の身の上、不足の品と思ふてくださるな。——さ、シーリア様、そろそろ参りませう。

リシロ まゐりませう。そんならアノ御大事に。

兩人打ち連れて歩み出す。驚喜のあまり言葉を得ざりしオルランド、後にておられるこなし

ラオル エ、腑甲斐ない！焦りたい！難有うムる位の返事が何故出來ぬ。爰に立つて居る此軀軀は、島の案山子か、たゞの木頭か、毫碌するにも程がある。

ロザリンド、歩み乍ら

リロザ アレ何ぞ妾達を呼んで居るやうぢや。——

言ひつゝ歩みをとどめ

世が世故、今更高くとまつて居る氣もせぬ。何の用事か尋ねて見ませう。

と後に立ち戻りて

モシお呼びてムりましたか。——ホンに卿の今日の働きは、又格別でムりました。敵も味方も、そのお手並には、アノ誰も感心して、了ひましたわいなア。

リシ 一 ロザ様——さう参りませうわいな。

リロ ザ まのりますわいなア。ノ萬望御大事になされませ。

とロザリ、シ、リ、リ、兩人退場

ワオ ル えと馬鹿々々しい今日に限つてこの舌の重苦しさ！何ういふ理

由か、さまりがわるくて話が出来ぬ。その癖先方では何ぞ自分に内密のと思召がありさう。ちや、オルランド、汝は何といふ活智なした。全然敗北ぢや、汝は誰やらとの勝負に見事負けたぞ。



好は者拙氏ドンラルオ一ル
たつ悉に告勤ざわさ上意
立を地土のこく早も時一が
い善がたれら去ち

再登場
ル・ホー
オル
ランド
氏拙者
は好意

上わざ／＼勸告に参つたが、一時も早くこの土地を立ち去られるが善い。貴殿の今日の働きといへば、眞に賞歎の外はなく、君の恩寵、諸人

の尊敬、一身に集めて然るべきぢやが、いかにせむお上の御機嫌麗は
しからず、貴殿のする事、爲すこと、皆逆鱗の種となつて居るから致し
方ない。元來お上には、翻覆不定のお資質ぢや。今一々其真相を申し上げ
んは餘りに憚り多し、それとなく推察あつて戴きたい。

ラオル
難有う存じます。時に貴所様に折入つても尋ね申しますが、アノ
何方が國主さまの御女にムリまするな、勝負の折に爰にも見えにな
つた御兩方の中で。

ル・ポ
イヤ何れ劣らぬ梅櫻何う御見あげ申してもお上の御種とは見え
ませぬな。實はお身材のお低くき方が、眞實の姫君てゐる。今一方は
あれは舊國主様の御女お上の命にて、姫君のお相手に引き留められ
て居ますのぢや。イヤこの御兩方のお仲の睦しさ、眞身の姉妹にも例

がムらぬ。さり乍ら、近頃お上には、このお優さしい御姪御さまに對し
て、何うやら御不興の御模様。シテその理由といへば、下々の衆が自然
と備るこの姫の徳に懐き、又姫の父君への義理を忘れず、情思を寄せ
るといふ迄、近き内に國主の忿怒が必らず爆發するでもムらう。イヤ
御大事にされるが善い。その内天運循環して結構な時世ともならば、
何れ又改めて深き御交際を願うと致さう。

ラオル
色々御世話様に預りました。それならば失禮致します。

とル・ポー退場

イヤ前後をとりまく水火の責苦、人の悪るい國主どのに、人の悪るい
兄者人——併シアノ奥床しいロザリンド姫！

と退場

第三場 殿中の一と間

シリア姫、ロザリンド姫登場

リシアー モシ何うなされました！モシ、ロザ様！困りますよ！何故その沈黙？

ロザリンドの顔を覗き込みていふ

ンロザリ 狗に投げてやる言葉も持ち合はせぬわいな

リシアー そりや狗猫に投げてやるのは勿體ないに決つて居ります。でも、妾には、御返事の一ツ二ツ投げてくだされても宜しいでは、ムりませぬか。さう足腰が立たぬ程投げて置きます。

ロザリ それでは從姉妹同志が病身になつて了ひます。一人は理窟攻めて

不具者又一人は理窟が分らぬので發狂者

リシアー それにしてもロザ様、アノよもや貴嬢は、父上の御身の上を案ずるのみで、そのお憐れでもムりますまいが？

ロザリ ハイ、アノ幾分かは自分の所爲かも知れませぬ。デモ思へば刺さば、厭な浮世ではムりますな。

リシアー 其様ナことを一々眞面目にお氣に留めて何うなされます。少し側路に踏み入れれば、栗の球彙やら、草の穂やらいふものは、婦女の裳にはよく飛びついて参ります。

ロザリ 衣裳に附着いたものなら振ふた丈で除れますが、妾のはこの胸に刺つてぢや。

リシアー 咳の一つもおやり遊ばせ。

リロザ 咳せきて人目の垢かきが除とれますなら、やりもしますが……

リシ 一 其様そのようナ煩惱ぼんごうの犬いぬとやら、早く組み敷くみぢいておやり遊あそばせ。

リロザ ても先方せんかたには相撲すまぐの名人めいじんが附ついて居ゐます。

リシ 一 アレ確たしかかり遊あそばせ。負まけても、又また悪わるつて行くのでムります。戯じぎやう

談だんはそれとして、これから本氣ほんきに伺伺ひますよ。一體いったいロザ様さま、たつた一ひと目見みたばかりで、それでアノ、サー・ローランドの遺愛いあいの和子わこ様が、しみじみいとしくなれますものでムりますか。

ロザ リンドの肩かたに手を懸かかり、眞面目まじめくきりていふ

リロザ ても妾めかけの父上ちやうじやうは、サー・ローランドが、とりわけ寵幸めかけいりぢやつたわいな。

とわきを向むきて、きまり悪わるるげに答こたへる

リシ 一 父上ちやうじやうが寵幸めかけいりぢやつたとて、貴嬢あなただが、その子こを愛あいする道理道理がムりますか。

同じ道理道理で押おせば、妾めかけはオルランドが憎にくい筈はずでムります。妾めかけの父ちやうじやうは、あの方かたの父ちやうじやうを、何なにより憎にくんで居ゐたではありませぬか。でも、妾めかけは些ちしも、オルランドが憎にくくない。

シリアツイと向むふに行く、ロザリンド追おひ纏まとりて熱心ねっしんに、

リロザ アノ、シリア様さま、妾めかけが可哀相あはれななら、オルランドを憎にくいとは思おもふてくだされませぬ。

リシ 一 何故なに憎にくいと思おもふてはなりませぬ？ 憎にくんであげてよい方かたではムりませぬか。

リロザ それでも妾めかけは愛あいします。妾めかけが愛あいする上うへは、貴嬢あなただも愛あいして戴たがいます。

とシリアの腕うでに手を懸かかりしが、この時國主ときくにぬしの姿現すがたあらはれ、

急いそぎに飛とびのく

アレ彼所にお上が御見えになつたわいな。

リシ 何やら畏ろしいお眼光ぢやこと！

國主 フレアツグ近侍の面々登場

國主 ロザリンドに向ひ

國主 コラ、卿は至急身装束致せ。そして殿中より退去致すのぢや。

リロザ アンそれは妾の事でムリまするか？

國主 おゝ卿ぢや。今より十日以内に、都の二十里以内に於て、卿の妾が見ゆるが最後、卿の生命は無きものぢやぞ。

リロザ アン、一言お上にお願の儀がムリまする何時いかなる過失が妾にムりましたか兎も角もそれを申渡されての上に願ひ度う存じまする。我身て我身の氣が知れぬ夢狂病者でもあるなら知らぬこと、日頃

精神に何の別條もなく暮らして居るつもりの妾——叔父上様妾は苟且にもまだ悪い事を思ひ付いたことはムリませぬ。

と國主の前に跪く

國主 それは謀叛人の紋切形ぢやよ——若し無罪の辯明が口頭丈で済むものなら彼等は盡く清淨潔白の身とならざるはなしぢや。兎角の文句は一切無用卿を油断のならぬ曲者と余が思ふて居る丈で充分ぢや。

謀叛人の一語をきいてロザリンドはツとなる

リロザ でも叔父さまが御嫌疑なされたとして、その爲めに妾が謀叛人とやらになりはしませぬ。何所に謀叛人らしい様子があるのでムリまするか。

ときつぱり言ふ

國主 卿は父の娘ぢやらうが それ丈で充分ぢや。

と空囁きていふ

リロザ それが今日始まつたこととムリまするか。貴所が父の領國を押領されし時にも父の娘、貴所が父を追放されし時にも父の娘でムリました。謀叛は血統を引きませぬ。よしや親子の間に傳はるものとして、それが妾に何の妨害、父は謀叛人ではムリませぬ。それ故叔父様、この薄命な身を捕へて謀叛人呼ばゝりをしてくだされますな。

氣を張りてきつぱりと述べ、最後の一句に至りて急にくづをれて涙を呑む

リシ 父上様、妾からも申上げ度うムリまする。

國主 あゝ何の儀ぢや。元來ロザリンドを留めあさたるも、皆卿の利益を

思ひての仕業、さもなくば、父諸共夙うに流浪人の仲間入りをさすべし身の上なのぢや。

リシ ても父上様、あの當時、妾からお願い申してお留め申した譯ではムリませぬ。ロザ様を引き留めしは父上の御思召、御自分のお氣がとがめてなされし業。その頃妾はまだ年齒の行かぬ悲しさ、ロザ様をさほど大事の方とは思ふ程になつて居りませぬ。されど現在の妾は、ロザ様とは一身同躰。若しロザ様が謀叛人なら、この妾とて同様に謀叛人。諸共に就寝み、同時に床を離れ、學ぶにも遊ぶにも、食事をするにも、何時何處に行く折も、番離れぬ鴛鴦のやう、必らず一所に揃ふて居らぬことはムリませぬ。

國主 ハテ卿などには相手がちと狡猾過ぎるわえ。あの如才ない應對や

ら、又あの口數少なく、勘忍強き所やらが、不思議に人民の氣に協ひ、誰一人可哀相ぢやと思はぬ者はない。然るに卿とときはよくくのうつけ者、悉皆御株を奪はれて知らずに居る。若しロザリンドさへ失せおつたなら、卿とても幾分か器量が引き立ち、身軀の估券が附いて來やうといふものぢや。それ故何事も申さずに居れい。一旦下したる余が宣言は駟馬も及ばぬ。——ロザリンドは追放ぢや。

シ ！ それなら同じ宣言を、妾にも戴き度うムりまする。ロザ様と別々ては、生きて居る瀬がござりませぬ。

國主 それぢやから卿はよくくのうつけ者ぢや。ロザリンド、卿は至急身仕度致せ。若し期定の時日に遅れるに於ては、苟くも一國の君主の宣言に違背は許さぬ——死刑なるぞ。

と國主フレアリック、近侍の面々退場

ロザリンド袖もて顔を掩ふて泣き伏す、シリーア擬乎

と父の後姿を見まもりつゝ

シ ！ ロザ様、何うしたものでムリませうわいな。妾と父親を取りかへてはくださらぬ？ 貴嬢に父を上ますわいな。

ロザリンドの方に向き直り

モシ、ロザ様、妾のつらさに比ぶれば、貴嬢などは何てもムリませぬぞえ。

ロザ 妾の方がつらいわいな。

と尙ほ泣き伏しておる

シ ！ 何のつらい事がムリませう。さア御機嫌をお直し遊ばせ。父は妾の

事も追放したではムリませぬか。

リロザ 何の其様ナ事がありますもので……

とツンと側を向きていふ

リシ 其様ナ事が、アノ無いと被仰りますか？あゝロザ様といふ御方には、切つても断れぬ親友間の眞の友情がないと見える。

惘然として歩み出せしが、又立ち戻りてロザリンドの側に跪きつゝ、

コレ、ロザ様、今更二人の仲が引き裂かれても構はぬとお思ひなさるか。離れくゝになつても厭はぬと思召すか。妾は厭てムります。父は他に嗣子の者を捜すが善い。それ故ロザ様、妾に力を添へて、殿中を忍び出る方法なりとお考へ遊ばせ。何所を目途に、何品を身につけてまゐりませうか。貴嬢ばかりが追放の憂目を見、妾を外に、一人くよく

歎くものとは思召すな。神様も見そなはせ、貴嬢が何と被仰るとも、妾はお後に附いて参りますわいな。

リロザ でも何所と申して目途も無い……

シロリは少時黙考の後

リシ 叔父上のお後を慕ふて、アルデンの森に向ひませうでは。

リロザ アレまア飛んでもない。婦女の身でそのやうな長の旅路に出て何うなさる。金より顔が賊の眼につき易いと申すではムリませぬか。

リシ 妾は粗末ないやらしい衣裳をつけ、又繪具でこの顔を塗り隠して了ひます。貴嬢もさうなされませ。屹度道中別條はムリませぬ。

リロザ それならシロリア様、妾は並外れて身材が高い故、と思ひに男子の服装をしませうか。

と急に勢つきて立ちあがる

腰には山刀、手には手槍、肚の裏こそ臆病で女々しくとも、外面丈は力味かへつた、猛々しい様子をつくるに、さして穴ヶ敷いこともムリませぬ、男子の中にもよくこの手段で外面ばかりの強がりが見受ける。

リシ 一 ホ、若し貴嬢がいよく、男子に成り済ました曉には、何といふお名前て呼んであげませう？

と笑ひ乍ら言ふ

リロザ 有り觸れた、平凡の名前は面白くない。ジヨブの神の小姓の名をそっくり、是非ガニミードとしますわいな。それはさうと貴嬢のお名前は？

リシ 一 現下の身の上に何所か因縁のあるものにしてませう。シーリアといふ名前は今日で廢止、アリエーナと呼んでたもれ。(アリエーナは流涙人の意)

リロザ それはさうとシーリア様、御殿からあの茶坊主を連れ出すのは何うてムります。幾らか道中の氣晴らしになりませう。

リシ 一 彼者なら、妾に附いて世界中を廻ります。その連れ出し方は妾が引き受けます。さア一時も早く貴嬢の手荷物を掻きあつめ、後の追手のがれるに都合のよい時刻の選定、仕損じのない方法の工夫、何や彼や、精々智慧を絞るとしませう。妾達の身の上は籠から飛び出る小鳥そのまゝ、何のこれが流罪でムリませう。

シーリア、姫兩手を差しのぶれば、ロザリンド、姫之を握りて大に勇み立つこ

なしにて

兩人退場

第二幕

第一場 アルデンの森

哲國主 エーミエンス(哲國主の近侍)及び二三の近侍登場、皆山賊の服装

主 哲國 何うぢや仲間の衆何所も住めば都とやら、かゝる生活も爲慣れて見れば外面を飾れるけば、くしい生活より結句愉快、人氣なき山林の方が猜忌で固めた宮殿よりも却つて安穩で善いやうぢや。この地に住みて痛いと思ふは、先づ寒暖の變遷、推移位のもの。例へば、かの氷の牙をかみ鳴らしてヒューと吹き渡る冬の風ぢや。五體に吹きつけ、噛みつく時は、ぞつとばかり慄ひ上りはすれど、自分は何時も打ちほく

るみ、これは御世辭がなく、うれしい。人間の分際を省みさせる益友ぢやと申すが、常ぢや。人間に取りては苦勞が何よりの良藥、かの毒々しい蟾蜍の頭に貴重なる珠玉がある道理ぢや。それに、遠く俗塵を隔てたるわれく、の生活には、獨特の妙味も具はり、囁く樹枝に人語をさし、流るゝ細河に書物を見出し、石からは説法、その他何物からも教訓を見出す、こりや容易に棄てられぬ生活ぢや。

エーミエンス イヤ、お上のやうに御幸福な方は滅他にあるまいと存じます。かくまで不遇薄命の逆境に沈淪されながら、優々自適、いかにも天命に安んずるといふ御様子が、お見えになる。

主 哲國 時に何うぢや、これから鹿狩と出懸けては？——たゞ何う考へて見ても殺生は罪の深い遊興ではあるな。彼等鹿どもは、元來此山林の

土着の住民、班點染の襦袢を着て、大平の夢を見て居るものを、今更その領土に押し入り、尖頭の割れた鍬を用ゐて、その丸々とした臀部を突き刺さうといふのぢやから。

甲 近侍

さう御仰せなれば、ホンに例の陰氣の蟲のヂェークス(昔國主の近侍、陰氣にして奇癖ある人物)は除程此事に就きて神經を痛め、お上は鹿の領土の横領者ぢや、國主の位を奪ひ取つた御弟御様よりも酷いと罵るのでムリます。ツイ本日のごとでムリます。エーミエンス卿と小臣とが溪流のほとり、例の樫の大樹の根方に於て、不圖ヂェークスの姿を認め、人知れず其背後に忍び寄つたのでムリます。しますると此時件の場所に迷ひ來れるは、同伴を離れし一頭の牡鹿、獵夫の射矢に深手を被りてシク／＼と嘔り泣き、苦しげな呻吟を立てる都度、皮の衣は今にも

張り裂けもするかと思はるゝばかり、大粒の玉の涙は、ポロリ／＼と鼻頭に行列を作つてまゐるのでムリます。眺める者は陰氣の蟲のヂェークス泣いて居る者は毛衣の鹿造落つる涙に瀑つ瀬もまざるばかりの大愁歎、イヤ近頃の見物でムリました。

哲 國

シテ、ヂェークスは何を申した。何ぞ一場のお説法があつたぢやらうナ?

甲 近侍

それはモ、有つた段ぢやムリませぬ。先づ第一が彌まざる河の流れに、鹿の涙が墜ちる所を捕へて、ヤレ／＼鹿、汝も矢張世間并に、有り餘つて困る所に、寄附を致し居るナ——次に、件の鹿がたゞ一頭、その同類から振り棄てられて、さびしさうな所に眼を附け、フムげにさもあるべき事ぢや、心許せる友垣の間も、不幸の爲めに割かるゝ世の習慣

ぢや——やがていかにも暢びりと肥え太れる一頭の獸物が件の鹿の側をば知らぬ顔の半兵衛にて跳んで行くのがムリますると、汝肥え脂ぎれる者よ、余は汝の近窟に任す。世間皆斯くの如し。一敗地に塗れたる破産者に對して、一顧を與ふるの道理はないのぢや——大體右の通り、いかにも苦々しげに陰氣の蟲殿は、頭から國家を罵り、社會を罵り、宮廷を罵り、現在吾々の送りつゝある此山林生活をも罵り飛ばし、お上を始め、吾々一同は、何れも皆純然たる横領人ぢや、暴戾無慘の凶者ぢや、此天與の住宅に住める無垢可憐の動物をば逐ひ出して、殺戮を逞うする追剝強盜の類ぢや、とまで極言するのでムリました。して卿達は、陰氣の蟲が右の如き冥想に耽つて居る所をそのまゝ見棄て、參つたのぢやナ。

乙近侍 左様にムリまする涙に咽せる鹿に向ひて、泣きつゝ口説きつゝさまさまの文句を并べまするのを後に見まして……

若國 右の場所に案内致せ。余はチエークスが濫面作つて、すね返つて居る所を見るが何より好物ぢや、かゝる時に最も警句を吐く男ぢや。

甲近侍 然らば早速御伴致すてムリませう。

と一同退場

第二場 殿中の一と間

國主フレデリック、近侍の面々登場

國主 たゞ一人も、彼等の姿を認めたものがない筈はよもあるまい。察する所殿中に不逞の徒があつて、此逃亡に加勢致したに相違ない。

甲近侍 畏れ乍ら、姫君の御姿を拜したと申す者は、頓と見當りませぬ。御附

の腰元どもは、姫君が御臥床に御寝の所を確と認めました趣然るに
翌くる晨には、姫君の御臥床は藻抜の殻、最早影も形もなかつたと申
す儀にムります。

乙近侍

してかの不屈者の茶坊主——お上が日頃御眼をかけられて、お笑
草の種となされてムるかのタチストーン奴が又失せおりました。シ
テ又姫君の御附のヒスビリア(腰元の名)の言葉によれば、姫君とロザリ
ンド姫とは、力士チャールズを物の見事に破りし、かの若者の器量
をばしきりに讃頌されて居られし趣にムります。で、御兩方が、何れへ
お越しあつたと致せば、件の若者が必定御隨伴致して居るものとの鑑
定にムります。

國王

誰かある、馳せ向つて、かの若者を引捕へて參れ！當人が不在とあ

らば兄なる者と呼び寄せ、彼者に命じて搜索致させる。一刻の猶豫
もならぬ、呆れ果てた逃亡人、彼等を連れ戻す爲めには、いかなる穿議
いかなる糺問も憚るには及ばぬ。

と一同退場

第三場 オリヴァーの宅前

オルランド及びアダム出遇がしらの林にて登場

ンオル

それに見えるは誰ぢや？

アダム驚喜して馳せ寄る

ムアダ

ヤレ、ま、若旦那でムりますかい。コレ若様、若旦那様！大旦那様
生寫のオルランド様！斯様ナ所に何の御用がムります？何故さう

貴所は親切で、人から無闇に好かれるのでムります。何故さう心が優しくて、その辨腕力があつて氣丈夫でムらしやります？何故又う



ムダア 決して家に歩も入らぬ
下此の底にえれしまりなはて
が敵仇む妬を量器の所貴はに
はだすま居てん住

お手柄の風評は聞えて居ります。これ若旦那様器量が却つて身に仇

をすることがムります。貴所の器量もその通り、立派は立派ぢやが、それが油断のならぬ反問者ぢや、併しま考へて見りや呆れ返つた世の中、奇麗な物に毒があるだ。

ラオ
ムア
グ アレさ、全躰何うしたといふのぢやよ。

この家に一歩も入つてはなりましねえ。この庇の下には、貴所あなたの器量を妬む仇敵が住んで居ますだよ。外でもねえ、それは貴所のお兄様——イヤ兄様でも何でもねえが、兎に角大旦那様の子息さん——イヤ子息でもねえ、子息といふのも業腹な男が貴所の今日のお手柄を聞き、今夜の中に、日頃貴所がお寝みになる小屋諸共、焼き打ちにしやうといふ畏ろしい魂膽をしてゐるだ。若しそれが首尾克く運ばない

なら、その時は又他に種々の手段を運らすに相違ねえ。俺はすっかりこの奸計を立聞きして来ました。若旦那、爰は立ち寄るべき場所ではムりましねえ。屠牛場だ、處刑場だ、地獄の鬼の住所だ。お願ひだから入つてくださりますな。

前後に心を配り乍ら調子をおろして言ふ、オランダ開き了りて少時默然たりしが、やがて儼然として

ウオル 入つてくれると言ふて、アダム、これから何所に行けといふのぢや。

ムアダ 何所へお出でになつても、そんな事は構はねえ——たゞ入らなければ善い、此様な家に。

ウオル それでは乞食にでも出懸けよといふのか。それとも物騒な利刃三

味、天下の往來をうるついで切取強盗でもせいと勘めるのか。さうてもせねば、他に差當り自分には仕事がないが、いかに切迫つまつたとて、それも厭ぢや。寧ろ兄らしくもない兄の毒手にかゝつて、温しく死んで了ひたい。

ムアダ それは善くねえ。御了簡だ。俺、若旦那、これでも五百兩の現金を持つて居ます。こりや大旦那様に奉口中に、せせと溜めた臍線金、つまり足腰がさかなくなり、他人から相手にされなくなつた曉の依みの杖でムりますが、之を貴所に差上げます。聖書にも、天帝は鴉に餌を與へ、雀にも飢餓を知らせぬとムります。この天帝は決してこの老爺をお見棄てになりもしめえ。これが其五百兩、そっくり收めて戴きます。そのかはり俺を萬望、今日から下僕にして戴き度いもので、斯う見えても

まだく達者なものでムリますぞ。これと申すも若い時分に強烈い御酒を戴かず、又彼の精氣に大毒な女蕩樂といふものをしなかつたお蔭、御覽の通り冬の日のシヤッキソ引き緊まつた身體の鹽梅霜はかゝつても故障がねえだ。仍て是非随伴にさしやい。御用とあれば何事でも、今時の若い者のする丈の事は、立派にやつてお目にかけるだ。

ラオル

爺や、實にその心掛は感心なものぢや。往時の物堅い奉公人は、報酬といふ事には目もくれず、たゞ職務の爲めに汗水を垂らしたときくが、卿がそぐりそれだ。卿は現時の人間ではない。現時の人間は、たゞ自分一人の出世を目途に稼ぎ、一旦その希望が協ふた上は、即時に骨を惜みにかゝる。卿は少しもさうでないが、爺や、氣の毒乍ら、卿がそれ程骨を折つて、身を入れて呉れても、つまり枯木の培養と同様、花一ツ咲く

望もないが、併し折角の厚意ぢや、兎も角も一所に出るとしやう。大事の金子が盡きない中に、賤陋乍らも何ぞ纏りのついた活計に逢着けさうなものぢや。

ムアダ

イヤ、若旦那、迅速が勝ちや、氣息のつく間は、身を粉に碎いて何所までもお随伴をするだ。

とオオルランド退場

アダム急に思ひつきたる牀にて、オオルランドに合圖して、獨り屋内に入り、襦袢、秋帽子等を持ち出す

考へて見れば、取つて十七の昔から、八十近い今日迄の長の奉口が、今日がいよく奉口の千秋樂。人は十七の時に浮世に出る。八十の聲がかゝつてからでは、聊か遅滞。しかし、思ひ存分御主人様に奉口して、や

る丈やつて死ぬる程先づ本望なことはねえ、

とアダム退場

第四場 アルデンの森

ロザリンド姫は男装してガニミードの服装、シリア姫は賤の乙女アリエーナの服装、同伴の道化坊主タッチストーンと共に登場、何れも長の道中に大疲労の休

ロザリ 慾にも得にも、モーク 困憊抜いて氣が遠くなつたわいな、
タッチス トーン 氣などは遠くなつても近くなつてもよけれど、たゞこの脚が困憊たには弱りけりだ、

とすれたる風にて地上に坐り、肩より荷物をおろして之に凭れ乍ら脚をさ



タッチストーンは頭倒にアルデンの森で酔つてつ了
た白面もい

する

リロザ 妾とて、そりや内心では、女子に戻つて泣いても見たいわいな。併しそれでは義理が悪るい。この脚半、胴卷の凜々しい姿に對しても、足弱を慰めねばならぬ譯。それぢやからコレ、アリエーナ、確かりにしてくれ

し

リシ 萬望アノ勘…… 妙忍してたもれ。モ…… 脚が重くてなりませぬ。重いのは脚ばかり、身軀の目方は軽い筈。たしか懐中は空虚でありませう

と隅の方にてアツ／＼言ふ

リロザ それはさうと、これがいよ／＼アルデンの森ぢや。

タツチ ホンに到頭アルデンの森まで潜ぎつけて了つた。面白くもない自

宅に居れば、モ少しこれでも氣のきいた所に居られる身だ。イヤ併し旅に出ては不足は無用か。

リロザ ア、さうとも／＼不足などは言はぬことぢや。

コーリン(牧羊者)及びシルヴァス(全上年)登場

兩人とも一行の人々には氣がつかずに居る様

リロザ オヤ誰かゞ來たやうぢや。若い男と老人とが、何やら眞面目腐つて對話をして居る。

と二人の田舎者の談話に身を入れてきくこなし

リコン それぢやから貴様益々情婦から粗末にされるのぢやよ。

アシルヴィ イヤ爺やなどには、俺の戀わづらひはとて分りッこはねえ。

リコン 少し分るよ。俺ぢやとて、往時は女子に惚れたものだ。

ウシ
 イヤ、お前はモ、梅干の老人、若い時こそ鶯鳴かしたこともあれヨ、モ、とでもこの俺の戀の苦勞は察しられるものでねえ。若し實際お前が俺のやうな苦勞人であつたといふなら——多分其様ナ事はあるめえとは思ふが——若し萬が一にもあつたといふなら、何な様子ぢやつた子其時分は？餘程氣の知れねえ馬鹿な真似もしましたか子？

リコ
 色々馬鹿な真似もしたが、今ぢや残らず忘れて了うたよ。

ウシ
 ソレ見ねえ、たゞの一度も眞實の戀わずらひの味は御存知なした子、只の一件も昔のことが頭腦に残らぬやうでは、一度も戀の味は知らねえ。お負けに又現在の俺のやうに、好いた女子のお惚て聽者を散々困らせるのでなくちや、一度も戀の味は知らねえ。それに又コレこ

の通り、思ひつめては矢も楯もたまらず、相手の話をそ、ち除け、フイと飛び出して行くやうでなくては、まだ一度も戀の味は知らねえ。——
 オ、イ、フィービーさん！フィービーのフィービーのフィービーさん！

と夢中にかけて出し乍ら退場

リコ
 ハテ氣の毒な今の若者！卿の話につまされて、思はずこの胸の疵までが痛み出すわいな。

タツチ
 タツチ、ストーンも至極眞面目くさりて泣き顔をしながら

タツチ
 ハテ私とて御同感でムります。左様今でも忘れはしませぬ。嘗て私が戀の病にかゝつて居た頃は、腰の刀を石で叩き折り、チェーン女郎(愛名)の許へ通つた形見のつもりで、それを件の石につかはした事がムりました。左様、又或る時は愛婦の日頃手なれた砧(たがひ)に接吻し、また輝だ

らけの愛婦の手に絞りつけの牝牛の乳房を嘗めもした。左様、それから又或る時などは、豌豆の莢をいとしい人に見立て、その果實を二粒摘んで又元の莢に收め、さめくと泣きの涙で、この私がいとしいなら、この品を肌身離さず居ておくれなど、申したこともムります。ホーンに戀の病に罹つて居るものは、時折不思議な真似をするもの、之といふのも、つまり人間は露の生命、濡れ事にかけて夢中になるものと見えます。

リロザ 卿は中々氣のさいたこと言はしやる喃、御當人は氣がつくまいが

タッチ ハイ、自分の洒落に衝き當つて向脛でも摩りむかなければ、それに氣がつく人間ぢやムりません。

リシ アノ二人の中で一寸あれなる老夫を呼び、金子は望み次第つかはすゆゑ、何ぞ食事の世話をと依んでたもらぬか。モ、太儀で、死ぬやうぢや。

タッチ ストーン 起きあがり、勿体ぶりでコーリンを呼ぶ

タッチ コラ、茶坊主！

リロザ 叱ッ！あの老夫は汝の同輩ではない。

コーリン 再び舞臺にかへる

リコ ハテ何誰かも呼びてムりますか。

タッチ 神妙に致せ！其方づれとは身分違のわれ。

リコ 違つてしあはせ、此方づれと同様では三度の食事も満足には行かぬえ。

リロザ 叱ッ餘計な事を申すナといふに。

とタツチを制し

イヤ爺さん、善い所でお前に遇ひました。

リロザ これは、各位様何か御用でもムりますか。

リロザ 實はお爺さん、お前に一ッ折入つて依頼がある。若しこのやうな山奥で何とかして食事が出来るものなら、御苦勞ぢやが御世話をして呉れまいか。見らるゝ通り同伴の女子が、長の旅路に弱わり果てゝ居るのぢや。

リロザ それは、可哀相成らうことなら、最う少し何とか都合のつく身分なら善いがと、イヤ全く自分の爲めよりも御嬢様の爲めに思ひますわい。併し、何をいふにも俺は他人さまの日傭取牧羊から取りあ

リロザ げる利益は皆御主人の懐裡に入る身分でムります。又俺の所の主人と申しますのは、珍らしい吝嗇漢、他人さまに功德を施して後世を圖るやうな柄でない。お負けに、目下は牧羊も牧場も悉皆賣物に出してある始末。不在を預る番小屋には、彌々以て差上げるやうな食物は頓とムりませぬ。しかし、まゝ兎に角御座らしやるが善い。出来る丈の事は、懇應してあげます。

リロザ 牧羊や牧場の買人といふのは、一跡何人ぢやな?

リロザ ツイ先刻まで爰に居た、アノ年の若い百姓でムりますが、ナニ別段望んで居る譯でもムりませぬ。

ロザリンドとシリア二人にて少時小聲にて相談して後

リロザ さういふ譯ならお爺さん、若し卿が迷惑でないなら、一ッその番小屋

も牧場も牧羊も、一切買ひ入れてはくれまいか。代金は勿論當方で出すのぢや。

序に卿の給金も殖やしてあげる。妾は大變この土地が氣に入りました。斯んな所なら一生涯面白く日が暮らせませす。

イヤ賣買の相談なら俺が必ず受合ひますわい。兎も角も一所に御座らしやれ。一應查べあげた上で、いよく地面もよし、收入もよし、牧羊者の生活も面白いと被仰るなら、これから俺は改めて貴所方の奉公人、金子を戴いて早速買入れの手續をつけて了ひませす。

一同退場

第五場 森の中



枕草に側にしたわて陸下の木のりどみも色
よんさまるせばあに歌の鶯を喉の慢自

エ
ン
ス

あ
る
人
）
そ
の
他
登
場

色もみどりの木の下蔭で

わたしの側に草枕

自慢の喉を鶯の

歌にあはせる主さんよ

ちよと来い くちいと来い 来

い

爰は極樂
つれないものは

たゞ吹きあらぶ冬の風

クアエー モーッ。仰ぎ願くは、モーッ。

と皮肉にいふ

ミエー ても、君が又氣が鬱ぐと氣の毒ぢや。

アエー 氣が鬱ぐ、何より結構。仰ぎ願くは、モーッ。かかせて戴きたい。臍が卵を

吸ふやうに、拙者は又歌から鬱ぎの虫を吸ひ出すのが十八番。仰ぎ願くは、モーッ。

ミエー 生憎ながらこの銅鑼聲、とても御意には協ひませぬ。

と傍を向く

アエー 拙者は御意に協はして貰ひたくも何ともない。たゞ君の歌をきけばよ。さ。さ。一段、是非一段。――イヤ歌に一段は可笑いか。

ミエー 何うとも御隨意で。

と少しうるさがる

アエー イヤ名稱などは何なりと構はぬ。別に歌に縁もゆかりもある自分

ぢやない。何うぢや歌ふてくれぬかネ。

と飽までも冷然としていふ

ミエー 仕方がない。厭だけれども歌はうか。

アエー こりやお禮の四半分位は言ふてもよ。さ。さ。うぢや。併し一體御禮の辭といふ奴は、二疋の猿の挨拶を、くくり、我輩などは他人から丁寧な挨拶を受ける毎に、こりや自分が何時か銅貨の一個も呉れたので、それで斯んなに追従されるのかと不審を起すネ。さ。さ。歌ひ玉へ。

他の人々に向ひ

君達は歌が厭なら黙つて引込んで居玉へ。

ミエー では拙者が歌の始末をつけると致さう。——君達は今の中に食事の用意をするが善い。御上はこの樹の下で御酒を召さるゝが善い。ぢや、ヂエークス君、お上は終日君のことを尋ねぢやつたよ。

ヂエー 拙者は終日お上の前を逃げて居るのぢや、何うもお上の議論好きにはやり切れない。勿論拙者として色々の事を考へる丈は、敢てお上に劣らずぢやが、何にも之を口に出して吹聴はせぬ。さうすといひ聲音を拜聴しやう。

歌

夢の浮世の榮華をすて、

(爰は一同合唱)

日向ぼこの野良住居

わが手作りの物食うて

不足を言はぬ主さんよ

ちよと来い／＼ちよと来い／＼

爰は極樂

つれないものは

たゞ吹きあらぶ冬の風

ヂエー 昨日拙者も同じ調子の歌を作つておいたが、一ッ御覽に入れやう。格

別興に觸れて作つたといふ程でもないが。

ミエー 拙者が是非それを歌ひませう。

ヂエー 先づ斯ういふ歌ぢや。

ヂエークスは間に合はせの歌の文句を考へ乍ら靜かにのべる

驢馬の姿にその身をかへて
金銀も財寶も皆打ちすてし
たゞ殿さまの御機嫌を
とるがのぞみの馬鹿さんよ

ダックダミー

爰は極樂

目につくものは

たゞお仲間の馬鹿ばかり

一同呆れてやゝしばらく無言、たゞ目と目と見合はす

ミエー 歌の中の「ダックダミー」とは、一體それは何の事て？

ナエー これかナ、こりや古語で、愚物どもを歌の席へ呼び寄せせる爲めの呪

言ぢや。

一同思はず失笑する

さて眠れるなら拙者はこれから晝寝ぢや。若し眠られぬなら、埃及生
れの惣領の甚六どのを罵倒してくれる所思ぢや。

ミエー 拙者は又お上をお迎に参る所思ぢや。御食事の用意が整ふた。

と各自別々に退場

第六場 森の一部

オルランド及びアダム登場

アダム大に疲勞の跡、オルランド之を扶けて居る

ムアダ 若旦那俺はモ一歩けませぬ。ア、腹が空へた、俺は爰に斯う寝

て、そのまゝ、極樂往生……。おさらばてムります若旦那。

と絶え、くにおひりて崩るゝ如く地上に倒れる

オドル

コレサ爺や、何うしたものだ。其様ナに弱り返つて、餘りといへば活智が無い。モ少しの我慢だ、奮發だ。これ、モ少し氣を取り直して呉れよ。若しこの山奥に野獸でも住んで居れば、

と四邊を見廻はし乍ら

俺が之に殺されて餌食となるか、それとも其奴を殺して卿の餌食にするか、何方かにする所思だ。卿は氣の所爲で、其様ナに弱り返つて居る。コレ後生だ、俺の爲めに元氣な顔を見せて呉れ。死神を少時扼止めて居て呉れ。さうする中に、やがて俺が戻つて来る。若し俺が何ぞ食物を携帯へて來ぬなら、その時は卿に死なせてやる。併し戻らぬ中に死

んで了ふやうな事では、それでは折角の俺の骨折を無にするといふものだ。

アダム強いて起き上り微笑を見せる

ア、よく言つた出來した。顔色も餘程善くなつた。直に俺は戻つて來るぞ。

オランダ、囁せ出て、又戻り

併し卿は寒風に吹きさらされて居る。さ、何所か物蔭に連れて行つて上げやう。若しこの山奥に何ぞ生物が住んで居るなら、決して卿を餓死にはさせない。善いかい爺や、氣を落さずに居て呉れよ。

オランダ、アダムを扶け起して立ち去らんとする時に幕

第七場 森の中 (第五場と全一)

川惹されたる食卓をおく

哲國主、エーミエンス其他近侍數名登場

主 哲國 彼奴獸類などに姿を變へはしまいかナ。如何に搜しても人間の顔を
をしたデエークスに會はぬ。

甲 近侍 お上に申上げます。デエークスが爰を出懸けましたは、ツイ先刻歌を
さし乍ら大層陽氣に致して居りました。

哲國 アノ調子外れの理屈家が音曲の趣味を解すとあつては、こりや天
地が倒まにならぬとも限らぬ。誰を行つて搜して參れ。余が用事があ
ると申すがよい。

甲 近侍 イヤ尋ぬる當人が參りましたしてムります。お蔭で手数が省けました。

デエークス登場

哲國 ホホー如何いたしたナ？浮世といふものは不思議なものぢや。卿
の如きものに一と目會ひたいと申すものが、爰に幾人も居る。——これ
はしたり、日頃になくニコ／＼ものぢやナ！

デエークスはクス／＼吹き出し乍ら、強いて日頃の眞面目を装はんとするこ
なし

クデエークス フ、道化……道化の馬鹿と森の中で會ひました。それが金箔付き
の正眞の道化の馬鹿で、誠になさけなくなつて了ひます。何うあつて
もあれは馬鹿に相違がムりませぬ。それが地上に轉がつて、日光浴を
し乍ら中々凝つた文句で、運の女神の悪口をついて居ります。——が、

馬鹿は何處までも馬鹿で！乃て拙者がオイ／＼道化の馬鹿どのと呼びかけました。すると、イヤ先生この身に運が向いて来る迄は馬鹿と言ふてくださるナとの返答（運は馬鹿者に向く古語あり）それから懐中から時計を引き出し、薄どんよりした眼光（くろくろ）でそれを眺め乍ら、いかにも意味ありげな面持、オ、最う十時ぢや、世の移りかはりの迅速（はやい）のがこれでも分る。九時をさいてから、まだ一時間にしかならぬ。更らに一時間を経過すれば十一時となる。かくの如くにして刻一刻、人の身は熟しに熟するかと見れば、やがて刻一刻、果物とひとしく腐りに腐る。光陰矢の如しとは實にあゝ善く言ふたものぢやと、これがその獨語（ひとりごと）。拙者はかゝる金箔附の道化坊主が、歲月の経過に就きて、斯く説法するのをさいた時は、餘りの可笑（おかし）しさに思はずも、キヤツと噴笑（はなはな）しました。左様彼奴の

時計で物の一時間ほどのべつ幕なしに笑ひましたらう。イヤ全く素晴らしい道化！稀有の大馬鹿者！兎角世間は金箔附の大馬鹿者に限ります。

哲國 一體何者ぢやナ、その馬鹿者といふは？

ナニ イヤ實に稀有の大馬鹿者！あれでも嘗ては御殿奉公も致したとやらで、年のお若い貴婦人なら一目で必らず自分を見抜いて呉れると大意張りて居ります。そしてその頭腦（かみね）！イヤ頭腦と申した所が、長い航海後の食ひ剩しのビスケット（ビスケット）そのまゝ、全然乾酒切（ぜんぜんけんしゅきり）つて居るのてゐるが——兎も角もその頭腦の隅に一寸警句を貯へおき、それを矢鱈（やたら）に發散（はつかん）けます。イヤ拙者なども茶坊主であればよかつた。矢鱈（やたら）の道化服が羨ましくてなりませぬ。（茶坊主に矢鱈（やたら）の妙な衣裳（めいとう）を着す）

哲國 是非一着余がつかはさう。

アニー これは何より有難う存じます。但しお上には、以後拙者をば并の人間待遇にさるゝ事は御無用にムります。又同時に自由自在、勝手氣儘な特權を與へられて、誰彼の差別なく、言ひたい氣焰を言はせて貰はねばなりません。茶坊主なるものは皆それが許されて居る。シテ拙者の嘔語の爲めに最も急所を刺されたものは、最も多く笑ふべき義務があるので、何故又笑ふべき義務があるかと申すに、その理由は一路極めて明白、誰にも分ります。縦令内々腹の底が痛きにもせよ、道化の馬鹿に弱點を衝かれた時に、慌けおつて聽かぬ態をせぬ程氣のさかぬ事はない。さうでもせぬ日には、御伶俐なお方の弱點が馬鹿の吐いた出鱈目の惡口の爲めに全然分解される事になります。兎

も角も拙者には是非八鱈縞の道化服を賜はり、勝手な出鱈目を喋る特權を許されたう存じます。かくして若し世間の人がおとなしく拙者の投薬を服んでくだされば、受合つて隅から隅まで此醜惡の穢土を洗ひ淨めて御覽に入れます。

哲國 何の埒もない事！ 卿のやりさうな事は大方分つて居る。

アニー これはしたり、拙者は決して世の中の不利益はせぬつもり。

哲國 アイヤ他人の罪惡を罵るは、取りも直さずこれ最大罪惡ぢや、元來卿は放蕩無頼、情慾の凝塊ともいふべき人物。隨ひてその身に感染した塵物やら膿汁やらを、一般世間に振り撒くに相違ない。

アニー クスは國主の攻撃には頓着せず自分の勝手を言ふ。

アニー 言ふ迄もなく、驕奢の弊害を鳴らせばとて、それは毫しも或る特殊

の人士に對する攻撃とは相成らぬ。驕奢の風は依然として天下に彌蔓し、終に彼等の財彙を涸渴せしむるに至りて止むてはムらぬか。例へば拙者が一般市井の婦女を罵り、取るにも足らぬその身軀に、王公貴人の富を飾ると申したとて、それが決して何所の誰を指したといふことにはならぬ道理。其近隣に類似のものどもが限りもなく存在する上は、攻撃されたはこの身であるとは誰も言ひ得ぬ。下司の中には、或は、へん大きに憚りさま、自分の着て居るこの衣服は、何にも汝の金で買ったものではないなど、的切自分を悪口されたものと邪推して、毒口吐く奴があらうも知れぬど、それは自から求めて自分の馬鹿をわざ／＼拙者の言葉に當て嵌めるといふもの。先づ斯うした次第で、憚り乍ら何所に何ういふ言ひ懸りの個所はない。若し拙者の言

葉が先方の急所を突いたとすれば、悪るいのは先方の御當人。又先方が青天白日の身ならば、拙者の攻撃は馬耳東風とき／＼流されて、誰しも之に頓着する者はない道理——が其奴は一體何者ぢや？

この時オルランド拔劍して登場

ンドルラ コラ待つた！しばらく食事を中止せよ！

と亂暴にわめく

ゲニー 我輩はまだ食事を始めて居ないよ。

と極めて粗末にいふ

ラオル 始められて耐るものか。先づ空腹の者に食はせい！

ゲニー イヤにボン／＼騒ぐ奴、何ぢや、何者ぢやらうナ。

哲國 こりや、若者、卿は困窮の餘り、そのやうに鐵面しい事を申すか。それ

とも元來の無頼漢、禮儀といふものを心得居らぬのか。

と殿かに、されど和氣をこめていふ

ラオル イヤ最初の御推量がよく的中りました。骨身を穿つ困窮に外見も
禮儀も打ちわすれ、思はず働いた只今の狼藉、斯う見えても、元は内地
の産多少の禮儀は心得て居ります。

この間にサエークス排はず食事始める、オルランド見とがめて

が、コラ控へぬか。此方の依頼が叶はぬ中は、果物一ッ手に觸れるが最後、
生命は拙者が貰ひ受けるぞ。

サエー

汝の方でさう物の道理をさしわけなくては、我輩は餓死して了ふ。

と、持てるナイフを投げ出す

哲國 一躰卿は何が欲しいのぢや。腕力沙汰を棄て、穩便に申出づれば、

われ／＼とて穩便の返事するといふものぢや。

ラオル

實は空腹に耐へぬのぢや。食物を恵まれたい。

哲國

御易い御用ぢや。席について腹をこしらへるがよい。

この一言にオルランド今迄の無禮を耻ぢて面目なきこなし

ラオル

何ともこれは穩當な言葉、これまでの雑言は平に御容赦を願ひ
ます。實はかゝる山奥故よるづ野蠻の風習と存じ、それ故心にもな
き只今の權柄面を致したわけにムります。それにしても、かゝる山
林に住居と致し、陰氣な樹蔭の下に蹲り、時刻の經つのも知らず、爲
すこともなく月日を送らるゝ、貴所方の御身分は、全躰何てムります
な？曾ては世に時めいたこともあるとか、貴紳の筵席にも列したと
か、他人の不幸の貰ひ泣き、人をもあはれみ人にも憐まれたとか、よろ

づ人間並の交際を了解して居る方々なら、拙者も一ツ改めて穩便の手段をとるとしませう。乃て先づお羞かしい此劔は、元の鞘に收めます。

西國 卿の申す通り、われ／＼とて曾ては世に時めいたこともある。寺院の鐘に呼ばれて参詣も致し、貴紳の筵席にも列し、他人の不幸にも貫ひ泣きしたこともあるぢや。それ故安心して穩しく腰なりとかけ、何にぞ爰に有る丈の食物で空腹を凌ぐがよい。

と親切にいふ

ラオル それでは、少時お食事を控へて戴きたいものでムります。一寸一と走り行つて捜して来るものがあります。實は拙者に一人の老人の從者がムりまするが、永の道中をばたき、主思ひの一心に、動ぬ脚を漸く爰まで引きずつてまゐりました。積もる年齢とさいなむ飢餓、この二ツ

の敵に惱まされしこの老人が、先づ食事を致す迄は、拙者は一口も物食ふ氣にはなれませぬ。

西國 さういふ譯なら、早う捜してまゐるがよい。卿の戻る迄は食へ荒さぬ事に致さう。

ラオル 難有う存じます。一寸一と走り行つてまゐります。

とオerland退場

西國 さう卿も今目前見る通り、不幸は獨りわれ／＼のみには限らぬ。この廣い浮世の舞臺には、われ／＼が演じて居るより、最と悲しい愁歎場が幾もある。

デエー 左様、世界はこれ大劇場、すべての男女は皆役者、登場もあれば又退場もある。して一生の間には何人も種々の役割を演じ、大躰に於て幕

の数は七個になるです。先づ初めの幕が襦袢の中の赤兒、オギヤ、
と乳母の懐にありて涎を垂らす。次ぎはあろく泣きの小學生徒靴
を肩に艶々とした朝の顔、居所の羊の學校通學、足の運びは迅からず、
その次ぎは色氣の盛時、火爐をあさむく溜息、長太息、情緒にあてし、あ
定まりの濕つばい俗語をうなる。さてその次ぎは國家の干城、粗暴に
出來た軍隊言葉、豹を欺く唇邊の髯、名を惜み耻を知り、やゝともすれ
ば喧嘩口論、名譽の水泡を得んとして、大砲の口端にも飛び込んで行
く。次ぎの時代は村年寄、苞苴の雞肉に便々と太れる大鼓腹、七六敷い
兩の眼氣取つて作れる髭髯の恰好、そして尤もらしい諺やら、眼先さ
の變れる例證やらを擔ぎ出して、御役目立派に勤め了せる。第六幕は
ヒロく疲せ削けた樂隱居、足には上靴、鼻には眼鏡、そして腰には

巾着袋、若い時から秘藏の股引は、今はその蚊脛にダブくと空隙だ
らけ、高調子の丈夫らしかりし音聲は、いつしか小供にかへりて、ビ
くと隙間漏る風の音。さていよくと此不思議な芝居の千秋樂は、あ
れども無きに似たる二度目の小兒齒なし眼なし味なし、何にもかも
残りなしの皮。

と靜かに熱考的にのべ、各時代の不愉快なる點にて語氣を強め、最後の老誌
時代に接近するに及びて次第に、ながくしげになる
オルランド、アダムを伴ひて再登場。

哲國 あゝ善く参つた。その大事の荷をよろして食事をさせるがよい。
ラオル 何よりこの年寄の爲めに、お禮を申し上げます。
ムアダ アレサお困難は若旦那も御同様——自分の事より、若旦那の爲め

に難有うムります。

哲國 まゝ善う参つた直ちに食事にかゝるがよい身の上譚をさく事は暫し
時預りとして置かう。――

兩人この間に食卓に就く

誰かある音楽が所望ぢや、シテ、エー、ミエンス卿には歌ぢや。

歌

ミエ

荒れなば荒れよ冬の風

恩を忘れる人よりは、

いくらおのれがやさしかろ、

おのれの牙にかまれても、

うらみの疵の残らねば、

耐へられぬほどつらからず。

よい〜囃せ！色もときはの枸骨さまよ、よいやサ！

結ぶ友垣うはの空、契る戀路はたゞの夢。

さらばよい〜枸骨さまよ、

面白いのはこの浮世。

凍らば凍れ冬の空、

義理を忘れるものよりは、

いくらおのれがいとしかる。

水も氷らすさむさとして

友に賣られた心地ほど

その冷たさはつよからず。

よい／＼囃せ！云々

哲國 若しも卿が今申した通り果して故サー・ローランドの子息に相違なく又父の生寫と睨みたる余の眼力に過誤なくば、こりや眞實歡迎致さにならぬ。何を隠さう、余は卿の亡父を股肱と依める舊國主ぢや、尙ほ聽き残したる卿の身上譚は、余が假の庵に着きたる後にさくと致さう——

哲國主立ちあがり、アダムの前に一寸足を留めて言葉をかける、アダム立た

んとして立てぬこなし、

爺や、卿も同様に歡迎致すぞ——誰ぞ老人の手を引いてつかはせ——オルランド、余は卿の手を引いてつかはす。そして一伍一什の物語をさくとせう。

と一同退場

第三幕

第一場 殿中の一と間

國主フレデリック、近侍の面々及びハリヴァー登場

國主 何に！以來一度も逢はぬぢや？たはけたことを申せ！余が格別涙もろければこそ、もつけの僥倖、さもなくば居る居らぬの詮議は無用、現在前に居る汝を捕へて腹癒せをする所ぢやが、油斷をするな何所までも尋ね當て、舍弟奴を連れてまゐれ、鐘大鼓でほじくり出せ！生きて居らうが、死んで居らうが、今より一年經たぬ内に引きずつ

てまわれ。さなくばわが領地に住むことならぬ。汝の所有と名のついた土地財産何なりと苟くも没收の價值あるものは、一切官府に没收致す。但し汝に對する嫌疑の件を、弟の口より申し開くに於ては、その時は、解放致してつかはす。

アオリ ヴ さて、情なき殿の御言葉、この赤心がまだお分りになりませぬか。小臣は生れて以後弟を愛した覚えはござりませぬ。

國主 尙ほ以て不届な奴ぢや。物ども彼奴を室外に叩き出せ。してその筋のものどもに伝付けて彼奴の土地住宅を没收させ。恐圖々々致すな。手取り早く取計らへ。

と一同退場

第二場 森の中

オランダ登場、山腰の服装手に持てる紙片を樹枝に懸け乍ら

オランダ

願ふはわが歌この樹にかゝり戀の媒介依むぞえ、
それに御空の嫦娥さま、清く涼しき御眼もて、
雲の上なる御住居、月宮殿の彼方より、
わが生命なる麗人の、行方をとくとまもりてたべ。
なつかしいぞえ、ロザリンド、森の立木はわが手帳、
積もる情思を樹の幹に、記しとどめておくわいな。
つまりはこれもこの森に、さしかゝりたる世の人に、
めづるわが身の胸の中、讀んでほしさの素志。

斯うしちや居られぬ急げ、樹といふ樹をばかき削り、
無類飛切り美にして艶なわが戀人の名をば刻まん、

と退場

コーリン(老牧羊者既出)及ビタッチストーン(道主)登場

リコ 時にタッチストーンさん、お前様は牧羊者といふ此職業を何う思
はッしやるナ。

タッチストーン 左様先づ單にそれ丈に就きて考ふれば結構なものぢやが、牧羊者
の生活を送るといふ點が甚だつまらない。又出世間的といふ點は拙
者大に賛成致すが、孤獨的といふ點から見れば極めて厭ふべき生活
と思ふ。又それが田園の仕事であることは大に愉快に思はれるぢや
が、それが内裏と違かるといふ點に於て退屈でならぬ。又それが――

オイ、爺さん、よく聴いて居れ――それが儉素なる生活であると
いふ事は大に我意を得たりぢやが、しかし乍ら、萬事不足勝ちな點
がそれか拙者の腹におさまらぬ何うぢや老人、卿にも何ぞ説がある
か、學説が。

と突然立ちあがりてコーリンを見つめる

リコ 俺アナニ格別の事も知らねえが、所中斯んな事を考へて居るだよ。
――人間といふ者は心配すればする程安心が出来なくなるものだ。
金に力に満足、この三ツが無えのは、つまり善い味方か三人減つたや
うなものだ。雨といふものは濡らすもの、火といふものは燃すもの、牧
場がよければ羊が肥太る、日輪様が引込めば夜になる、それから智慧
の無え人、手腕の無え人は、それは教育が足りねえのか、それともよく

鈍な天質だ、など、ナ。

タツチ イヤこれなどは、うまれついでの哲人ぢやテ。時に老人卿は御殿奉
口を致したことがあるか。

リコ そればかりアムりましねえ。

と微笑しながらいふ

タツチ ヤレ、卿は浮ばれないぞ、地獄に墜ちるぞ。

とさも大衆にいふ

リコ そんな事もムるめえと思ふが……。

タツチ イヤ卿の身体はゆて損ねの腐れ卵臭い、何うあつても地獄の
厄介ぢや。

リコ ハテネ御殿奉口をしねえ所爲でかネ？理由をさしてえものだネ。



、々々い臭、卵れ腐のれ損てゆは林身の卿ヤイ、チツタ
、やぢ介厄の獄地もてつあう何

タツチ それは斯ういふ理由ぢや。御

殿奉公をせぬ上は一度も行儀
作法といふものを見たことが
ない。行儀作法を見たことがな
ければ確かに風儀がわるい。わ
るいことは罪悪だ、罪悪といふ
ものは、これ地獄の沙汰だ、ヤレ
老人卿は、モ、浮び損の亡
者だよ。

リコ 何アにその心配は更に御座
らねえわナ、御殿の中で結構な

風儀も田舎へ持つて来りや可笑なものだ。丁度田舎の風俗が御殿へ持つて行つて気がさかねえと、ものゝ理窟は同じ事さネ。お前さまの話によりや御殿では挨拶をするに、下々のやり方とは事變り、手を唇に當て、嘗めるだといふが、若しその人達が牧羊者だとすりや、餘程不潔話でねえか。

クツチ 何故々々、さア一口にその實例を見せい。

リコ 所りやお前さま、俺等は年中牝羊を取り扱つて居るだ。お前さまも知る通り、牝羊などの皮膚といふものは脂ぎつて居るわナ。

クツチ アイヤ御殿に奉公する者の手だとして汗を出す。羊の脂肪も人間の汗も別に違つたことはない。淺藁々々、さアモ少し氣のさいた實例を出したり〜！

リコ それに俺等の手はゴツ〜して硬いてねえか。

クツチ 硬ければます〜唇に感じ易い譯だ。又しても淺藁々々、さア、モ少し確かりした實例を出したり〜！

リコ それに又俺等の手には、羊の疵口を療治するので、よく樹脂がどツさり附着いて居るだネ。お前さまは俺等に樹脂を嘗めさせやうとするのかネ。御殿に奉公するお方の手ときては、麝香の香がブ〜して居る。

クツチ アイヤハヤ何所までも淺藁で持ちさつた男だ！我輩の眼から見れば卿などはロースの上肉の前に持ち出された切り出しの腐肉、チト以後は伶俐な人に頭をさげて、篤と首を拵つて考へて見るがよい。麝香などいふものは元々樹脂よりも、ずツと下等な原料から成るも

のだ、極めて不潔な猫の排泄物だ。さあ老人、モ少し實例を改良せんかよ。

リコ　イヤお前さまは御殿の檜舞臺で鍛へあげた腕前口頭ぢやとても協はねえ、しばらく止めた。

タツチ　それでは何にかネ、貴公は地獄へ墜ッ放して止めておくのか。ヤレ、可哀相な浅墓男だ！こりや何うしても療治ものだ。随分と頓痴戯だ。

リコ　何を言はつしやる、面白くもねえ。俺等は正眞ムキ出しのお百姓だ。食ふ物をわが手で作り、着る物をわが手で儲け、何人の怨恨も買はず、何人の幸運も羨まず、他人に慶事があれば喜んでやり、わが身に不幸があつても早速断念、この世で、自分の牧羊が草を食つて、仔羊が乳を

吸ふのを見て、何より自慢に思つて居るだ。

タツチ　それこそ又一ツ罪惡が殖えたわけだ。牝羊と牡羊との媒介をつとめ、動物の交尾を種に生計を立て、甘んじて親羊の圓戸となり、時々不似合極まる一歳位の若い牝羊をつかまへて、槌頭の古ぼけた、一夫多妻主義の老羊に押しつける。これで若し地獄に墜ちなかつたとすれば、そりや地獄の鬼さへ牧羊者には愛憎をつかして、御免蒙るものに相違ない。鬼に嫌はれるより外には、何うしても卿が浮ばれる見込はないネ。

リコ　アレサお嬢さまのお兄御さまが見えなすつたわナ、ガニミードさまが。

ロザリンド登場、ガニミードとして男装、オランダの掛けたる紙片を取り

て讀み居るこなし

リロザ

東と西の印度の中間に、

光る寶はたゞロザリンド。

廣い世界のどの隅までも、

びゞく御名のわがロザリンド。

秀でし美人の何の繪姿も、

比較のとれぬあの美しさ。

人の心にきざみて善きは、

ひとりこの顔このロザリンド

タツチ

何にかと思へば、^ヒ盡しの歌其様ナものなら、^{ひるがし}晝餐^{ばんがし}晚餐の時間と、眠る時間とをヌキにして、八年でも九年でも、ノベツ幕なしに歌ひつゝ

けてお眼にかける宛然物賣りの百姓女が、ゾロ／＼行列を作つて市場に出掛ける調子だ。

リロザ

うるさいわー！

タツチ

早速お手本をお目にかけるか——

ひよつと牡鹿に相手がなけりや、

ひッぱり込むべしそのロザリンド。

ひげの三毛猫さかりがつけば、

ひとつ思ひよロザリンドとても、

稗刈つて束ねて車に積むにや、

引き出す相棒はソレ、ロザリンド。

ひどくしぶいのは胡桃の殻で。

人でしぶいのはロザリンドさまよ。

引く手あまたの薔薇の木にや、

ヒツ、と痛い刺がある。

こりや、まるで荒ばれ馬がガタ／＼跳ね出したやうな調子だ。斯んな

歌をよむのは御身の汚てゝるぞ。

ロザ 又しても騒々しい。この歌は木の枝に懸けてあつたのぢや。

タツチ ホンにこりや、悪りい果實のなる樹だ。

ロザ これ静かにせい。妹が何ぞ讀み乍らやつてまゐつた。側へさがつ

て居るがよし。

シリーア 登場紙片を手にして眠む

リシ さいびしいなどは言ふまいものよ。

住人ないとしてナニ構やせぬ

森の木毎に舌をばかけて

味な言葉を言はせて見せう。

一ツの舌が言ふその言葉

陥みぞわづらう浮世の旅路

人の命のさて短かうて

五ツの指に數へつくさる。

ことなる舌が悲しむ言葉

たのまれぬものは浮世の誓

友と友との仲さへ違ふ。

たゞ姿態のよい木の枝毎に、

さては詞の終りの句毎、
 われは記さむ、たゞロザリンド。
 心ある人これにて知らむ、
 神の工夫の時にいみじく、
 天下の粹を一人に寄するを、
 見よ、神は自然を召され、
 やよわが爲めに衆美をあつめ、
 圓滿無垢の美人をつくれ、
 自然の母は仰せをかしこみ、
 胸をすてたるヘレンの頬に、
 クレオパトラの威嚴を加へ、

ロザ

妙にあはれッばい説教をする人ぢや、長々しい戀愛の講釋に散々

ける

アタランタの美ル、クレシヤの
 つまやかさを加味し玉ひぬ。
 かくて成れるはこれロザリンド、
 よき容顏に又よきまなこ、
 心までよき天の配劑、
 あめの羽衣縫ひ目とてなし。
 あはれかの人かくすぐれ、かく秀でたるはこれ神業、
 又わが身かの人の戀の奴となるもこれ神業、

シーリア讀み了る時、ロザリンド其背後に歩みより、手をシーリアの肩にか

参詣者を困らせておき乍ら退屈さまともよく言はずに居る。
リシ ！ これさ！

タッチ ストーンとコーリンとに向ひ

卿達は退いて貰ひます——爺や少し離れて居や。

コーリン 退く、タッチは却つて前に進みて話に預からんとするを見て
卿もぢやわいな、煩い！

タッチ 大不平にてコーリンの腕をとり、引きずつて大股に歩み去り乍ら

タッチ さア老人、名譽の退却ぢや、手荷物萬端とはまるらぬが、先づ職掌柄
此行厨でもさげて行かう。

とタッチ、コーリン兩人退場

リシ ！ それはさうと貴嬢はこの歌をお聴きになられて？

リロザ さし、ましたとも！聴きあさる程聴きましたわいな。

リシ ！ ても御自分のお名前が、森の樹に懸けられたり、刻まれたりしても、
別に不思議とは思召されませぬか？

リロザ それはモ、貴嬢のお出でになる前から、不審に不審を重ねて居り
ました。この歌などは、棕櫚の樹にさげてありました。何處の國かに、歌
で鼠を逐ふ呪咀があるときいては、おれど、この身が前世に鼠ぢやッ
た記憶もなし……

と歌の紙片をシロリアに渡して見せる

リシ ！ 何人の仕業か、お心當りはムりませぬか。

リロザ 男の方かしらん、

とわざと平氣を装ふて歩み出す

リシ | ホラ鎖を首にまきつけた例の御方かも知れませぬ——アレまア
お顔を赧くなされますの？

ロザ | ロザリンド 鋭く振り向く、

リロザ | じらさずと萬望お教え遊ばせ。

リシ | ホンに親しい朋達も、一坦別るれば容易に二度とは會はれませぬ。
と申して、ともすれば離れた山と山とが地震の爲めに一所になるこ
とも無いとは限りませぬ。

リロザ | でも例のお方といふのは、全體何人でムります？

リシ | おとぼけなさる。

リロザ | アレその方が何人ぢやか早くお教え遊ばしませ。後生一生の願
ぢやわいな。

と益々もどかしげにいふ

リシ | これはまア何たる不思議、不思議の不思議の又不思議！幾度不思
議と言ふても、聲が囁れる程言ふても、言ふても、言ひ切れぬ！

リロザ | シーリア様も、お人が悪るい！可哀相に男子の服装はして居ても、
心まで男子にはなつて居ぬぞいナ、塵ほどの遅延が山ほどの心配と
なる。焦らさずと、早う聽かせて安心させてくださるが善い。全體その
お方といふは、立派な御方？——何んな御様子？——天頭には帽子
があつて、それから唇邊にはお髭があつて？

リシ | いゝえ、髭は幾何も生いてはしませぬ。
とふき出しさうになりていふ

リロザ | 髭などはその内自然に生いて來ます生いて來るまで何時迄も待

つて居ますが、たゞ名前を早く被仰つてくだされませいな。

リシ | オルランドぢやわいな、アノ力士のチャールスとそれから貴嬢の
心まで、見事兩方一度に手玉に取つた。

リロザ | アレ御戯談はよしてなも、姫御前といふものは萬事しとやかに眞
面目にせねばなりませぬ。

リシ | でも全くロザさま、あの方ぢやわいな。
とまじめになりていふ

リロザ | エッ？あの、オルランド？
と奥驚せるこなし

リシ | 全くそのオルランド。
リロザ | まア何とせう、斯んな胴衣だの股引だのを着て居つて！

とあわて、身のまはりを見廻し

でも貴嬢がお逢ひになつた時は、あの方は何をされて居ました。そし
て何を言ふて、何んな御様子で、又何んな服装をされて居ました？一
躰何の御用で爰に在になるのかしら？何とか妾の事を尋ねまし
たか？住居は何所で？貴嬢とは何うして別れて？この次ぎは何時
頃御目にかゝります？一と口に言つてさ、かせてたもれ。

と口早に疊みかけて尋ねる、この間シリーアは句の切れ目毎に返事をせん
とあせれど甲斐なきこなし

リシ | これは御無理ナ！返事をする前にガトガンチュア(中の巨口漢の作)の
口なりと借りて来て貰ひます。今の世の中に、そんな言葉が樂に入る
口はムリませぬ。残る限なくそれに返事をするのは、アノ宗論の問答

より六ヶ敷い。

リロザ　でも、妾がこの森に住んで、男子の服装をして居ることを御存知かしら。相撲の折のやうに息災な御様子をなされて居るかしら。

と少しもシローリアの言葉は耳に入れぬこなしにて、終の句を盛さしくいふ

リシ　アレ又別のお尋ね、とても妾には其御返事は出来兼ねます。——兎も角も何うして妾があのお方に出會ふたか、そのお話を給仕してあげる程に、ゆっくりお毒味をなさるがよい。先づ見つけた場所は、とある木の下、櫛子のやうに落ちて居ました。

リロザ　こんな見事な實をならせる故、櫛の木は、神木(櫛の木はサユヒ)と呼ばれる筈ぢや。

リシ　お邪魔をされずに、おさしになられませう。

リロザ　さア〜。

リシ　樹の下に身を横たへ、臥せつて居りし有様は、負傷になやむ、武士そのまゝ。

リロザ　さぞそれはお痛はしい光景でムりましたらう。でも四邊の神々しい景色にはよく似合ひましたらう。

リシ　又してもお言葉が多い舌をしばらく抑へて居て戴きます。餘り狂ふ舌ぢやわいな。さて打見る所あのお方の装束はさながら獵夫リロザまアあぶない！妾の胸を射貫く氣かしら……

リシ　囃子方はお廢しなされといふに、談話の調子が狂ふて了ひます。とテレて立ちあがる

リロザ　それでも妾は女子の身ぢやわいな胸に思ふことは、そのまゝ口に

出したくなります。さア萬望その先きをさかせて……

迫ひすがりて眞面目になる

リシ ーでも談話の腰をお折りになるものを——コレ静かに——あれ

がアノ彼の方ではありませぬか。

リロザ さうぢやわいな。早う小蔭に行つて見張つて居ませう。

とシリア、ロザリンド退く

オルランド及びサエークス登場

イゲエ 我輩大に君と面會の榮を得たるを謝するネ、とは表面實は逢はずとも決して差支はない。

ラオル 私もその通りだ。たゞ據なく、世間並みに逢つて難有いといふてお



『うやしにとこぬせを會面は後今くべる成。やぢ構結アま』—エゲ
『たつかたりあて人他の赤のずら知ず見る寧』ラオル

イゲエ まア結構ぢや。成るべく今後

は面會をせぬことにしやう。

ラオル 寧ろ見ず知らずの赤の他人

でありたかつた。

イゲエ 時に君に一ツも依みがある

が、モ一今後は戀の歌などを刻

みつけて、樹の皮を疵だらけに

してくれるナ。

ラオル 此方にも君にお依みがある

が、モ一今後は苦虫を噛み壓し

たやうな顔をして私の歌を讀

んで、折角の名作を疵だらけにしてくれるナ。

ゲー 君の戀人はたしかロザリンドといふ名前だネ。

ラル 左様、その通り。

ゲー 虫の好かない名前だ。

ラル 君の氣に入らうと思つて令けた名前ぢやない。

ゲー 身材は先づ何の位かネ。

ラル 私の胸に屈いたり、協つたり。

ゲー 君は中々甘い返事を知つて居るナ。多分寶石屋の女房達と別戀に

なり、指輪の文句でも見て暗誦して居るのだらう。(指輪には通例内側に題

ラル さうでもないさ。

ゲー 何うだ君、我輩と一所に腰でもかけぬか。そして二人で人生の不幸

でも罵倒しやう。

ラル 私はこの世の中で罵倒したいのは自分一人だ。自分の缺點が一番

よく目につく。

ゲー 君の第一の弱點は婦人の愛に溺れることだナ。

ラル この弱點は、縦令聖人になれても中止したくないナ——僕はモ

君が煩さくなつたよ。

ゲー 實をいふと、我輩はヒョットコの馬鹿に逢はうとして居たのだ、所

へ君がやつて來たのだ。

ラル その馬鹿は、川へ溺没つた。一寸覗いて見玉へ。馬鹿の顔が映つて見

える。

ゲー 映るものは自分の姿だ。

ラオル その姿が多分馬鹿か、ヒョットコだらう。

サエー 君などの側に居るのはモト御免蒙る。イヤ失禮、色情狂君。

ラオル 御出掛けとは誠にうれしい。イヤ失禮、陰氣の蟲君。

とサエークス退場

オルランド静かに笑ひ乍ら樹皮を刻み始める。

ロザリンド、シリーリア再登場

ロザ (シリーリアに) これから妾が生意氣な小僧のつもりで談話をしかけ、

悪戯をして見ますよ——アノ一寸いと樵夫さん。

ラオル エッ何です、何の御用です？

ロザ アノ——アノ何時になります。

ラオル 何時頃とさいて貰ひたい。森の中には時計はないです。

ロザ それでは森には戀の味知らぬ方ばかり居ると見えます。戀人とい

ふものは、一分毎に溜息をつき、一時間毎に呻吟の聲を立てるものだと
いひますから、ノロマな時間の經つ位は、時計同様知つて居る筈で
はありませぬか。

ラオル 何故又ノロマな時間かしら、時間の經つのは迅いといふ方が寧ろ
通りがよくはないかしら。

今迄樹皮を刻むことに熱中し居たるオルランドは此時初めて頭を擡げて

ロザリンドを見、ハッとしたりした氣味、ロザリンドは成るべく顔を見せじと彼方

此方歩きまはる。

ロザ イヤ決して其様な事はありませぬ。時間といふものは、人によりて
種々な歩み方をする。調子よく歩むのもあれば、ビッコ引きく歩む

のもあり、駆け足もあれば、ちっと立往生するものもある。

ラオル 一體時間がピッコ引きく歩むといふのは何んな人ですナ。

リロザ それはアノ、結納してから婚禮の式をあげる迄の處女のことです。その中間がたつた七日位でも、それが七年にも見えるほど時間の歩みがのろい。

ラオル 時間が調子よく歩むといふは？

リロザ それは無學の坊さまと、無病息災の金満家のことですよ。一方は爲たいにも勉強が出来ないからすやく眠る。他方は又苦痛が無いから、氣樂に遊ぶ。一方には根氣の毒の學問といふ重荷がなく、他方には又身體の仇の貧乏といふ重荷がない。斯んな人達をつかまへれば、時間は調子よく歩みます。

ラオル 時間が驅足で歩むといふは？

リロザ それは所刑場へ連れて行かれる盗人のことです。いかに時間がゆっくり歩むつもりでも、盗人の方では迅速過ぎて困ると思ひます。

ラオル では、時間が立往生をするといふは？

リロザ 休暇を貰つた裁判官です。裁判の休暇の中間をまるきり眠つて暮らしますから、時間の經つのを知らずに居る。

ラオル 一體君は何所に御住居ですナ。

リロザ この娘と……この妹と一所に住んで居ります。場所は、この森の裾の方で、女の袴で申せば、先づ總のあたりで……。

ラオル この土地の産ですかナ。

リロザ 野兎同様、育つた土地は離れませぬ。

ラオ　でも言語のさゝ振りが斯んな邊鄙な土地で仕入れたものとして
は何所やら上品過ぎる所が見えますナ。

リロ　皆さまがさう被仰られますが、實は私の叔父に當る年寄の和尚さ
んに仕込まれましたのですよ。叔父はまだ若い時分には都會に住ま
ひ、宮仕への女子衆といろく／＼關係もありましたので、お邸の事は中
々通曉ものです。私なども所中女子のことについては説法をさか
されつけて居ります。幸に私などは罪深い女子と生れず、十把一とか
らげの叔父の攻撃を免れましたので、誠にうれしいと思ふて居りま
す。

ラオ　叔父さんが婦人の罪障として數へ立てるのは重もに何んなもの
ですナ。何ぞ記憶えてるのがありますか。

リロ　格別何れと申して、際立つてるのはありません。何れも先づ似たり
寄つたり。一ツ聽けば、それ丈が特別滅相なと思ひますが、次ぎのを聽
くと、矢張中々前のに劣りませぬ。

ラオ　お願だが、半分ばかり話してさかかせて貰ひたい。
リロ　イヤそりや可ませぬ。病氣の人でなければ、矢鱈にこの薬はやられ
ませぬ。

ときッぱり首ひ、先刻オランダが刻みつゝありし木の所に行きて見あげ
乍ら

何うも近來この森に一人の男が徘徊き、遠慮會釋もなく若木の樹皮
に「ロザリンド」といふ文字を刻つけて居る。また山楡だの、荆棘だのに
も歌を懸けておくが、これにも矢張り大事さうに「ロザリンド」の五字

を皆祭り込んである。若し彼様な色情狂にでも逢へば、私は忠告をしてやるつもりです。あの男などは確かに戀といふ一種の熱病にとりつかれて居ますから子。

之をきくオランダは、きまり悪るげに手に持てるナイフを一坦背後に隠す。やがて思ひ切つて之を前に突き出し

ラオル

イヤその一種の熱病にかゝつて居るのは、耻かし乍らこの拙者だ。萬望その療法を教えて貰ひます。

リロザ

何うも叔父から傳授された容體書は、貴下の御様子には當て符まらないてす。戀の病にかゝつて居る男子の鑑定法は、チャンと叔父から聞いて心得て居ますが、まだく貴下などは、確かに戀の捕虜になつて居ませぬ。

ラオル

シテその容體とは？

リロザ

先づ面焦れてす——之が貴下にはない。どんよりと窪んだ眼——

これも貴下にはない。言語をきくのが倦怠さうな様子——これも貴下にはない。それから蓬々と亂れた髭鬚——これも——貴下にはないですネ。——併しこれ丈は深く謎めるにも當りませぬ。まだ貴下のはホンの申譯に生いたばかりの髭ですから——それから又股引の襪紐が解け、朝子の飾帯が落ち、袖の釦鈕が外れ、靴紐がほどけ、その他身のまはり全體に放任の無茶苦茶な様子がなければならぬ筈です。——所が貴下は其様な人品でない。——何れかと申せば、寧ろ我身の容姿に浮身をやつして居るお方だ。戀に苦勞して居るといふ様子はなし。

ラオル　こりや困つた、何うにかして、僕の戀を君に信じて貰ふことは出来
ないかしら。

リロザ　私に信じて貰ふ！それよりは、相手の女子に信じて貰ふ方が容易
かも知れませんよ。私はよく知つて居ますが、口には出さねど心の底
で思ひつめるは女子の癖で、全婦人といふものは良心に反いたこ
とをよく致すが、これなどもその一ツなのです。イヤこりや眞面目の
話だか、貴下が全くアノ、ロザリンドの歌を樹の枝に懸けた御當人に
相違がありませんか。

ラオル　その事はモ一命にかけても誓ひます、全く私です、この不幸な私で
す。

リロザ　でも、實際あの歌の文句の通り愛して居ますか。

ラオル　歌にもヌケにもこの情思はとても言ひ盡すことは出来ませぬ。
リロザ　イヤ、ナニ戀愛などといふものはホンの氣紛れ、狂氣の沙汰、狂人同
様檻室に入れて鞭で打つに限るです。たゞ一ツ困つたことは、此戀愛
狂といふ病氣は、一般に流行がはげしく、鞭を加へる御當人迄が、矢張
り之に罹つて居る。尤も私に言はせると、この病は忠告で平癒せる。

ラオル　何時か、さうして平癒したことがありますかナ。

リロザ　一人丈あります。それは斯うです。先づ相手の男子がこの私を自分
の戀人、いとしい女子と假りに決めます。そして私の所へ日參してか
れこれと口説きます。私は元より悪戯さかりの青年の事故愁がほを
したり、にやけて見たり、グラ／＼に氣をかへたり、愛々しく、好いた殿
御は、主ばかりなど、言つたり、又高くとまつて見たり、移り氣を出し

て見たり、それから浮氣らしくもなれば、厭いとぼくもなる。涙もろくもなれば、笑上戸にもなる。色氣いろけといふ色氣は何なりとして見せるが、さりとて何の色氣にも、これぞと言つて纏まとまつた所、とりとめた所は、勿論無い。ざつと先づ、世間普通の女と男とが、日頃いちやついて居るやうな鹽梅。今日好いて居るかと思せれば、翌日は厭いとつて見せる。今大に取り持つかとすれば、やがて脛すねを食はせる。泣いて見せたり、唾つばを吐きかけたり、とう／＼相手の男を色狂いろまひから一變して、正眞ほんまの狂人とする。舉句きまぐちの果は、賑にぎかななる人混みの所が、厭いとになり、浮世をすねた詫住居、身にしむ秋を知るといふ所まで、過ぎつけてやる。斯様かゝり大事で先方の病を平癒なほしてやりました。これから一ツ同じ流儀で、貴下あなたの療治に取りかゝり、身體からだ中に戀の病の痕跡あともないやうに、清淨潔白にしてあげま

す。

ラオ 私はその療治は眞平御免ぢや、

リロザ ハテ貴下がたゞ假りに私をロザリンドと呼んで、そして毎日私の所へ来て口説くはきさへすれば、立派に直してあげますものを。

オムラ オルランド急に氣がかはれるこなし

ラオ 宜しい、それなら一ツやつて見やう。住居は何所ですナ。

リロザ 御一所にお出でになるがよい、御案内しませう。序ついででに貴下のお住居は森の何の邊か、さかして貰ひます。さあ、同伴どうはんしませう。

ラオ オツと承知、若い衆さん。

リロザ アレ、ロザリンドと呼ぶのです——さ、妹、お前も一所に。

と一同退場

第三場 森の一部

タツチストーン (茶坊) オードリ (田舎女にして前) 相携へて登場

アエークス背後に横く

タツチストーン

さつさと御座れ、オードリさん、拙者が卿の山羊を連れて来てあげる。時に何うぢやナ、オードリさん、拙者をまだ意中の人と思ふて居てくれるか。拙者のつまらない容貌に對して、何ぞ御不足の件はムリませんか。

オードリ お前さまの容貌だつて！容貌だか泥棒だか、何にが何んだか分らねえだ。

とクス／＼笑ひ乍ら蘇をとり出して煩張る、萬づ氣のきかぬこなし

チタ

往古詩聖オビド大人は、野蠻人の群に混りて配所の月を眺めたと申すが、拙者は今山羊の群に混りて卿の顔を眺める。彼も此もその心持は同一ぢやナ。

オードリの蘇を食ふ様子を見守りつゝ呆れたこなし

クアエース

(旁白)折角の故事も、かゝる奴輩に引證に出されては善い面の皮だ。天津大御神が九尺二間の茅屋に降臨しましたと同一格だ。(チタの神が賊民の茅屋にて原遇されし故事あり)

チタ

イヤ何うも折角名歌を詠んでもその妙味が先方に通ぜず、又折角警句を吐いても其意味が相手に曉らぬといふ場合には、御當人實にギャンと参らざるを得ない下らない居酒屋で、第一流のホテルほどの勘定を捲きあげられるよりも情ないチ。——ホンに卿が少し詩的



生に的詩し少が痴にホ]テツタ
[たつかよばいれくてれ

に生れてくれ、ばよかつた。

ドオ | 詩的といふのは、そりや何の事だネ、妾に些^ちとも分りましねえ。そりや嘘^{うそ}を吐かねえて、正直にする事なのかネ。正^{ただ}の物なのかネ。

チタツ | イヤ正直の所全^{ぜん}くさにあらず、所謂まことの詩といふものは、嘘^{うそ}詐^{まが}の多いものぢや、互に思ひ思はるゝ

男女といふ者は大變詩を好むが、さもあるべきことぢや、詩の中にて誓ふことは、戀人の言葉と同じく皆嘘^{うそ}や詐^{まが}が多い。

ドオ | ては、お前^{まえ}さまは、ア、妾^{わたし}が詩的であれば善いと思つて居らっしゃるのかい。

首ひながらマクリと燕を一と口頬張る

チタツ | そりや勿論思ふネ、卿^{きやう}が今言ふ通り卿^{きやう}は正直一方ぢや、が若し卿^{きやう}が詩人であつたなら、幾らか氣のきいた嘘^{うそ}が言へるだらうよ。

ドオ | お前^{まえ}さまは、妾^{わたし}が貞節^{てんせつ}するのが氣に入らねえのかい。

チタツ | そりや何にサ、卿^{きやう}が碌^{ろく}でもねえ御面相^{おんめんそう}であつた時のことよ、美人の上に貞節^{てんせつ}とされた日にや、蜂蜜の上に砂糖を振りかけたやうなものだからネ。

「旁白」中々味な事を言ふ阿呆ぢや!

「オ」 妾などは標致がわるい。それだから成るべく品行をよくして居たいと所中思つて居るだよ。

「タ」 イヤ善い品行を顔の醜え莫連者にくれるのは、立派な御馳走を缺皿に盛るやうなものぢやテ。

「オ」 妾はこれでも顔は醜くても、莫連者ではねえよ。

「む」として飛び立つ

「タ」 卿の顔の醜えのは、實に難有くて涙のこぼれる話さ。追っつけ莫連者になれさうぢや。それは兎に角拙者は、卿を女房に待つ所思ぢや。既に隣村の牧師どの、所へも行つて、儀式の事を依んで置いたが、牧師どののは爰へ来て俺達を夫婦にしてくれる事に手筈が整つて居る。

「オ」 (旁白)さぞこの結婚は見物だらうテ。

「オ」 まッうれしい! 幾久しく!

「タ」 ヤレ、氣の弱い人間などは、斯んな結婚には辟易して尻込みするに違ねえ。見渡す所、森はあれども寺院はなく、角のある野獸は居れども人間の皮を被つた來會者は一人も居ない。併し構ふことはない。爰が大に氣張どころだ! 額に生いる角は厭なものぢやが、出るものは致方がない。諺に曰く、ある所には金銀は幾らでもある、全くさうぢや。多數の男には角は矢鱈に生える所。この角は、これは皆女房の持參の品、自分の腕で作つた品ではない。ナニ! 額の角ぢや? 然り々々大に然りサ。ナニ! 可哀相な御貞主ぢや? それ然り、豈にそれ然らんやサ。しみ、たれの鹿と同じく、豪儀な鹿にも矢張り角がある。かる

が故に獨身者が幸福ぢや？ふざけ玉ふな城郭を以て圍まれた市街が何の風情もなき村落よりも價値ある如く、女房持ちの男子の額には、獨身者のガランとした額より自と貴い所がある。ミジメ乍らも防禦があれば素手より結構、之と同じく角でも、無一物よりは結構——

—オット牧師どの、オリヴァー老が御入來ぢや。

牧師オリヴァー・マートクスト登場

これは——オリヴァー・マートクスト老、善い所にてお目にかゝりました。いかゞですナ、此樹の下で手取り早く決着をつけてくだされますか、それとも貴老の寺院まで御同伴を致しませうか。

牧 花嫁さんを渡す爲めの介添人は居ますかいナ。
進物の品ぢやあるめえし、鬘斗付きの女房は眞平御免だ。

牧 イヤ是非花嫁さんを與れる御方が居りませんでは、婚禮の法に背きまするぢやテ。

イゲエ (小蔭より進み出て)やるべし——拙者が花嫁を與れてやる。

イゲエ ヤ今晚は、エート、名は何ンだか知らない先生、近來お變りもありませんか。丁度善い所でお目にかゝりました。先日はお蔭様で大變面白ラムりましたよ。全く善い所でお目にかゝつて何より大慶——ナニ極めてお手輕な仕事が今始まりかけて居るので——イヤ萬望帽子はそのま——。

イゲエ 茶坊主君には婚禮の思召と見えるネ。

イゲエ それは先生、牛に軛あり馬に轡あり、放鷹に鈴あるが如く、人間にも亦了簡があります。つがひの鳩もク——と嘴と嘴との私語濡れる

はひとり水鳥の羽がひばかりではムりません。

シテ何にかネ、苟くも貴公程の教育あるものが、藪の下に座り込んで、乞食然たるボロ婚禮をしやうといふのかネ、尋常に寺院に行か、しやい。そして婚禮の何物なるかを充分心得たる立派な坊さんに依むが善い。爰に居る生臭坊主などは、腰板でも箆める氣で、貴公達を夫婦にする氣で居る。其様な事では先づ以て前途の見込はない。必らず何方か、反りかへつて生木そのまゝ、ペコ／＼に曲りくねること受合ぢやテ。

（旁白俺の了簡ぢや、他の坊様よりは、矢張り爰に居る坊様に婚禮さして貰つた方が善ささうに思はれないでもない。その坊様なら碌な婚禮が出来る筈がない。碌でもねえ婚禮をしてあげば、この後女房に

秋風が立つて来た時、振り棄てるに善い口實になる譯だ。

「サア拙者の後に附いて来るが善い。色々言ふてきかせる事がある。

「オイ、オードリ姫、まゐるとしませう。是非婚禮はせにやならぬ。

「さも無い日には人目の牆をしのびづまうしろめたくてやりきれない——然らばオリヴァー老人これにて御免——

「モーション可愛のオリヴァーぬし、

「モーション大事のオリヴァーぬし、

「わたしを見棄てたまはるな——

「ぢやなくて仕合はせ、

「出て失しやがれ、

「うるせえ奴だ、

汝などにかゝり合つてたまるものか、
といふ所だネ。

と大陽氣にてオードリ、タツチ、ヤネ、クス退場

牧 くりや少しも苦しうない。斯様の奇怪なる奴ばらの爲めに、牧師の
職を臺なしにされてたまるものか。

と退場

第四場 森の一部、小屋の前

ロザリンド及びシーリア登場

ロザリンド
何も言ふてくだされますナ、妾は泣きます。

ロザリンドは面をシーリアに反けて坐り、物思ひの形、

リシア
泣くなら萬望御遠慮なくお泣き遊ばせ。たゞ涙といふものは男子
には不似合といふこと丈はお忘れなされますナ。

ロザ
でも泣かなければならぬ道理があるではムりませぬか。

リシア
道理はあつて、有り剩るほどあります。幾らでもお泣き遊ばせ。

ロザ
妾はあの方の頭髮が氣がゝりてなりませぬ。浮氣でもなさる色ら

しいものを、(この頃は頭髮の色に人物
の性質があらはるとせり)

リシア
褐色がゝつた赤でムりますネ。くりや餘り依もしい色ではムりま

せぬ。

ロザ
誰が見たとてあの頭髮は立派な色ではありませぬか。

リシア
無類飛び切りの色でムります。色はすべて褐色に限りませぬ。

ロザ
でも今朝訪ねると堅い約束をしてあき乍ら、何うしてあ出てがな

いのかしら。

と氣がゝりな面持

リシ | ホンに餘程不實な方と見えます。

と氣乗りのせぬ返事

リロザ | アレ貴嬢は不實と思召して？

と熱心に尋ねる

リシ | エ、そりやあの方は巾着切りでも又馬盗人でもムリですまい。け

れども二世も三世も約束を違へぬ實のある方にしては何所やら

蟲のついた胡桃そのまゝ、中身が空虚らしくはムリませぬか。

リロザ | では貴嬢はあの方を實がないと思召して？

リシ | 實際愛してお出でになるなら實もありませうが、それ程とは見え

ませぬ。

ロザリンドもットして

リロザ | 貴嬢は、あの方が卒直に誓ふ所を、先達お聴きになつたぢやムリ

ませぬか。

リシ | 先達と現在とは違ひます。それに男子の舌端など、申すものは、お

酒樓の番頭の舌端そのまゝ、虚欺と知りつゝ、誤魔化しにかゝります。

あのお方は目下貴嬢の父上のお伴侶をしてこの森に居られます。

リロザ | 父上とへいば、昨日妾は父上に遇ふていろく、談話をしました。そ

の時妾の素性はとのお質問ゆゑ素性は貴下に劣りませぬと申上げ

ました。すると大變お笑ひになつて、そのまゝ分袂しました。父上の事は

構へませぬが、氣にかゝるはオルランドぬし。

リシ
 ホンに全く素晴らしいお方でムりますよ。作る歌も素晴らしく、被
 仰る言葉も素晴らしく、お立てになる誓も素晴らしく、又その誓をば
 相手の女に頓着なく、矢鱈にお破りなさるお手際も誠に素晴らしい。
 全然下拙な騎馬の侍が、横なぐりに馬を乗りかけ、自身の槍を折るや
 うな御様子、兎に角血氣さかりの向ふ見ずの方のすることは皆素晴
 らしいものでムります。——アレ誰ぞ來ましたやう。

コーリン登場

リコ
 お嬢さまも若旦那様も、まアお聞きくだされませ。所中風評に上
 る牧羊者の若者がムりますナ。ホラ何時だつたか俺の側に、芝土の
 上に坐り込んで、脰を食はせた色女の事を散々褒めちぎつて居りま
 したらう。

リシ
 さうぢやつた子。あの若者が何うしのたぢや？

リコ
 何うてムります、本氣で演て居る芝居を御覽にならつしやりませ
 ぬか。相手の一人は真劍の戀わづらひ、血の氣のうせた青面、又他方は
 大意張り、大氣取りの赤面、中々の見物でムります。お厭てなければ、ち
 よくくらふ出てを願ひます。御案内しませう。

リコ
 そりや愉快ぢや、行つて見るとしやう。戀に苦勞をする身に取りて
 は、苦勞仲間が何より逢つて見たい。——さ、現場に案内して貰はう。拙
 者もその芝居に一座して、骨の折れる一役を引き受けて見るかも知
 れぬ。

と一同退場